

綠乃

掌編短編小說集

帝國

死に方自慢

「わしはベニテングタケを食って死んだ」

それ、また作蔵爺さんの自慢話が始まった。何度となく聞いたその一言を耳にした俺はちょっぴり陰鬱な気持ちになった。

作蔵爺さんは、この道一〇〇〇年というベテランの幽霊だ。少々気難しいところがあるが、後輩の面倒見がよく、真正直な性格なので皆からは好かれている。ただ老人にありがちな長話と、繰り返される自慢話には誰もが辟易していた。

「わしが食ったことで、あれには毒があることがわかった。わしが身を挺したからこそ、今、ヤツらはあれを食べることが危険だと知っておるのじゃ」

生者にはわからないだろうが、どのような死に方をしたかということが幽霊社会では一種のステータスになる。生前どれほど地位や名声を築いていた人間であっても、自殺や他人に恨まれて殺された人間は、幽霊社会では大きな顔ができない。逆に、他人のために命を投げ出した人間や、後の社会に何らかのよい影響を残したものは尊敬を集めることができるのだ。

「俺だってフグを食って死んだんだ。キノコなんぞよりもよっぽど上等じゃぞ」

負けず嫌いの五右衛門さんが、話に割って入ってきた。作蔵さんが気分を害したような表情を見せたが、すかさず五右衛門さんの隣に座っていた庄一が横槍を入れた。

「五右衛門はん。あんたの場合は確か、みんなが内臓を残していたのを、もったいないからいうて自分一人で全部食ってしもたんやなかったか」

五右衛門さんの話は、後世には笑い話として伝わっていた。本人には思いも寄らないことだっただろう。五右衛門さんは霊体中を真っ赤にして、小さく萎んでしまった。

「ともかく、だ」

霊界では長老と呼ばれているニニギノミコトが重々しく口を開いた。

「我々幽霊は、かのように生者たちに様々なものを残してきた。我々の犠牲があったからこそ、彼らは今の豊かな生活を営むことができるのだ」

全員がその通りとばかりに頷いた。

「だからこの時期に我々が少々悪さをしようとも、彼らはそれを甘んじて受けるべきだ。これは我々幽霊の権利である」

あちこちから賛同の雄叫びがあがった。作蔵爺さんも、五右衛門さんも一緒に叫び声をあげていた。

「それでは皆のもの。今年も参ろうか」

何億もの幽霊が嬉々として地上界へと飛び降りていった。俺も心が躍っていた。

盆と呼ばれるこの時期の間だけ、我々幽霊は地上界へ降りることができる。普段刺激の少ない霊界であるから、みんなこの時期を楽しみにしている。だから地上に降りた幽霊は、ここぞとばかりに生者に悪戯を繰り返し、ストレスを発散させるのである。

生者にとってはいい迷惑だろうが、彼らだってそのうちこっちに来るのである。これくらいは我慢してもらわなければ。

さて、今年はどうな悪戯をしてやろう。そんなことを考えながら、俺は地上へと飛び降りた。

(完)

ラストワード

自分の命がもう長くはないだろうことを、俺は悟っていた。

真横から殴りつけるように撃ち込まれた 9mm パラベラム。おそらく太い動脈か静脈を傷つけたのだろう。腹部に空いた穴から血液が止めどなく流れ出している。手足が痺れ、感覚がほとんどなくなっている。もうすぐ、立っていることもできなくなるはずだ。

扉のノブに手をかけたところで、そのときが来た。すぐそばの壁にもたれかかり、ずるずるとへたり込む。限界が、近づいていた。

「ジェームズ！」

人の気配を感じたのか。開いたドアから顔を出したナタリーが、俺の姿を見て驚きの声を挙げた。地面には大きな血溜まりができてはいるはずだ。驚かない方がどうかしている。

俺は彼女のために戦ったのだ。最後に彼女の顔を見ることくらい、許されたっていいはずだ。

「ジェームズ！ いったいどうしたの？ それに、この傷は……。ともかく、早く救急車を呼ばないと！」

家の中へ戻ろうとするナタリーの右腕を俺は掴んだ。もう手遅れなのは俺自身が一番よくわかっている。命の蝋燭が完全に燃え尽きる前に、どうしても彼女に伝えておきたかった。

最後の力を振り絞り、心の内にずっと秘め続けていた一言を、俺は彼女に投げかけた。

「君を愛している」

意識が薄れ、魂が肉体から抜け出していくのを俺は感じていた。そして薄れ行く意識の中で、彼女の返答を聞いたような気がした。

「え？ なに？」

(完)

ゴッドハンド

俺には不思議な力があつた。

大きな声で喧伝できるものではない。だから、このことは両親を含め誰も知らなかった。ただ双子の兄だけが、俺のこの力に気付いていた。

この両手で女性の乳房を揉むことにより、双丘を飛躍的に増大させる。例えるならば、夏蜜柑をグレープフルーツに、グレープフルーツをメロンに生長させる。それが俺の力だった。俺の手には、類い希なる豊胸力が備わっていたのだ。

力に気付いたのは、三人目の彼女ができたときだった。俺は三度目の恋愛で、初めて女性と肉体的関係を持った。

付き合い始めた頃の彼女は、スレンダーで胸の小さい、モデル風の美女だった。ところが、関係を持つてからわずか一ヶ月の間に、Aカップだった彼女の胸は推定Fカップにまで成長し、身体の線もまろやかな女性味を帯びてきたのだった。体型に密かなコンプレックスを抱いていた彼女は大喜びしていたが、すでに俺好みの女ではなくなっていた。

その後も俺は、何人かの女性と付き合い合った。が、肉体的関係を持つや否や、彼女たちは徐々に胸が大きくなり、色っぽい体型に変化していった。16歳の少女を恋人にしたこともあるのだが、そのときもやはり、少女はすぐに年齢に似つかない肉体へと変貌を遂げてしまった。

何か理由があるに違いない。そう言ったのは、兄だった。

これだけ連続して同じことが起こるのなら、何か理由があるはずだ。それが兄の考えだった。

要因として考えられるのは、お前の手しかない。一度病院で検査を受けてみる。兄は俺にそう勧めた。一人の女性と長続きしなくて困っている、俺を見かねての忠告だった。

俺は病院で検査を受けた。

結果はすぐに出た。俺の掌には、女性ホルモンの働きを活性化させる効果があることがわかった。この力はどんな男性にも備わってはいるらしいのだが、俺の場合はその効能が顕著なのだという。

治せないのかと聞いたら、意外そうな顔をされた。世の中にはまだまだ巨乳好きの男の方が多いようだった。

報告を聞いた兄は、自分の推理が当たっていたことをたいそう喜んだ。そして、

「お前にそんな力があるのなら、俺にも何かあるかもしれない。早速俺も見てもらおう」

と、勇んで病院へ向かった。そういえば、兄も巨乳好きだった。

数時間後。兄が意気消沈した顔で帰ってきた。

力は見つからなかったのか、と聞いた。

「見つかったよ」

と答えが返ってきた。だが兄の顔色は、まったく冴えないものだった。

兄は、頭を抱え、地面にへたり込んだ。

「お前の力が女性ホルモンの活性化。その時点で、気付くべきだったんだ。もしかしたら俺には逆の力が備わっているかもしれないって。しかも、俺の場合は掌じゃないんだ。俺の場合はこう、尻の穴で男のナニを……」

(完)

ハサミ男

昨日はデスクの引き出しを閉める際に親指を挟んだ。勢いのついたスチールの凶器は容赦なく俺の右手親指第一関節を強打し、俺は床の上をのたうち回ることになった。

同僚たちの間で、俺は「ハサミ男」と呼ばれている。もちろん、巨大なハサミを抱えて人を惨殺しまくるホラー映画の殺人鬼とはまったく関係がない。身体の一部を物によく挟む、挟まれることから名付けられた不名誉なあだ名だ。

根がそそっかしいのだろう。指をクリップで挟んだり、腕をドアに挟んだり、同僚が運んできた荷物で壁にプレスされたりと、一日一度は必ず何らかのハプニングが発生し、そのたびに俺は身体の一部を痛めるのだ。おかげで、俺の身体には年中生傷が絶えなかった。

先日など、今日こそは無事に一日を終えるぞと決心したその五分後、電車のドアに身体を中心線を挟まれた。俺の額にはそのときできた赤痣が、今もまだ残っている。

気をつけてはいるのだが、その緊張が持続できない。何かあると、焦ったり慌てたりしてしまう。そんな俺を、何よりも俺自身が一番不甲斐なく思っていた。変わらなきゃいけないという強迫観念が、俺の内面に渦を巻いていた。そのことが俺をさらに焦らせ、心の平穩を失わせるのだった。

そんな俺に光を与えてくれたのは、隣の席のユキコちゃんだった。

ユキコちゃんは、俺の親指に冷湿布を巻きながら言ってくれた。そそっかしいのは性格だから仕方がない。だったら人の二倍も三倍も周囲に気を配って、少しでも回数を減らしていけるようにすればいいじゃない。

ユキコちゃんの優しい言葉に、俺の心は大いに癒された。そして彼女のためにも、がんばらなければと思ったのだった。

そして今日。俺はここまで身体のどこにも傷をつくることなく仕事をこなすことができた。今日一日、俺は凄腕の狙撃手のごとくに身边に気を配り、ドアや引き出しなど稼働する物品に注意を払い続けた。もちろん、背中には課長でさえ立たせなかった。

そして今。俺の目の前で、時計の長針が退社時刻を指した。

「やったわね」

ユキコちゃんが小走りで俺に近寄ってきた。俺は彼女の手を取り、満面の笑みを返した。

オフィスを出た俺には、自信がみなぎっていた。自分が何か一回り、大きくなったような気がしていた。

電車には落ち着いて乗り込めた。焦っていたときには見えなかった周囲の状況が、クリアに見えていた。

俺は、無事家へと帰り着いた。

トイレで小用を足しながら、俺は一日を思い返していた。明日からは新しい自分になれる。そんな実感があつた。胸の奥から感動が少しずつ込み上げてきた。

玄関で来客を告げるブザー音がした。俺は、慌ててズボンのチャックを引き上げた。

(完)

這い回る蝶々

ハイマワル憲法第九条により、蝶長の飛行は禁じられている。

蝶長に就任したものは去翅され、飛べない状態で職務に当たることが義務づけられている。だから蝶長は残された六本足で、あちらをウロウロ、こちらをオロオロと動き回ることになる。

九条のおかげで蝶長同士の争いはなくなったが、地上に行くことで下々の蝶が触れあう機会も多くなり、蝶長自身ではなくその権益に興味を持つ蝶も擦り寄ってくるようになった。

飛行能力を失った蝶長に移動手段を宛ったり、花蜜や夜蝶を振る舞ったり。その態度はあからさまで、蝶民は皆眉をしかめたが、中にはそんな誘惑に負け、誘蛾灯へと導かれゆく例も少なくなかった。

各地で九条の撤廃が叫ばれるようになったのは自然の流れだった。が、叫んでいる蝶の九割は蝶長に羽があった頃を知らない世代であった。蝶議会に席を持つ蝶たちも戦争を知らない世代であり、そういった背景もあって九条撤廃の議論が声高になったのであった。

おしなべてこの世は弱肉強食。それは蝶たちにとっても同様であった。

辛かったことはすぐに忘れる。美しい姿態が土に汚れ、体液を垂れ流す死骸がアスファルトを埋める。

そんな未来が近付いている。

(完)

ベッドクリフ

そのベッドは比喩的な表現でなく断崖絶壁の上に設えてあった。

俺を拒絶するかのような絶壁。その絶壁から艶めかしい四本の脚が誘うように突き出ている。頂上では大喬小喬が、漆黒の薄物一枚の姿で俺の到着を待っているはずだった。

オーケー、つまりはこういうことだ。あの柔らかなベッドに辿り着くためには、俺はこの障害を乗り越える必要がある。そしてこいつは、見るからに難関だ。お前にできるのかい？ 険峻な壁面が、そう言って嘲笑ったような気がした。

舐めるなよ。俺は両掌に唾を吐きかけた。こう見えても、若い頃はクライミングで鳴らしたものだ。山よりも女性に登る回数の方が多くなった今日この頃だが、身体はまだやり方を覚えている。大喬小喬に俺のセック……愛の強さを見せつけるためにも、こいつは何としてでも乗り越えねばならない。

岩壁に指をかける。脚を固定し、小指から全身を持ち上げるように体重を移動させる。壁の起伏は激しい。足掛かりには不自由しないはずだった。女と同じだ。起伏は激しい方がいい。

身体を上へ上へと持ち上げる。全身に汗が吹き出す。運動不足の筋肉が悲鳴を上げる。だが、俺は登る手を休めない。ハーケンもザイルもない。頼るのは己の身一つ。

これは男の人生だ。俺の人生だ。男として生きるってことは、こうした険しい岩山を登り続けることなのだ。見栄と、やせ我慢と、心意気とで生きていくことなのだ。甘美な夢は、乗り越えたその先でだけ待っている。いや。大喬も、小喬だって気紛れだ。待っているとは限らない。それでも登るしかない。そういうものだ。

ざわつく音が耳を打った。下方に目をやる。お互いを鎖で繋いだ船団と、藁を積載した船団が対峙している。

あそこでも男たちの戦いが始まるのだ。そして俺には、もう戻る道はない。

俺は上方だけを見据え、登攀を再開した。俺自身の夢へと向けて。

(完)

「この社員食堂を、甦らせたい」

赤坂食堂長がそのような宣言をしたとき、その場にいた全員が、少なからず驚いた。

食堂長はこの食堂に配属されてから二十五年。変える事なかれ、揉める事なかれ、逆らう事なかれ。そんな事なかれ主義でやって来た人間だ。その人間からそんな言葉が飛び出すなんて、夢にも思わないことだった。

「いったいどうしたんですか、食堂長。何か悪いモノでも食べたんですか？ 青木のつくった賄いとか」

青木というのはこの前配属されたばかりの新人だ。手際が恐ろしく悪く、半分オートメーション化された社員食堂のメニューですらとてつもなくまずくつくりあげるといふ一種の才能を持った女だ。顔とポジションは悪くないのだが、この料理の腕前を見たあとでは付き合おうという気は失せる。そんなにこつちを睨む前にもっと腕を磨いて欲しいとつくづく思う。

「いやなに、ことわざでも言うじゃないか。立つ鳥あとを濁さずとね」

そう言って食堂長は遠い目をした。

「私も間もなく定年だ。ここにいられる時間も短い。だからその間に、私のできることをやっておきたいんだ」

何だか格好いいことを言っているが、今日までの食堂長の働きぶりをよーく見ている俺たちには大した感銘を与えなかった。

「で、結局のところ何をしたいんですか」

俺がそう質問すると、我が意を得たり、とばかりに食堂長は笑った。汚い笑い顔だった。

「ここに配属されてからまだ数年にしかならない君たちは知らないだろうが……その昔、この社員食堂は、昼食時には毎日が満席だったのだよ」

「えー。ほんとですかあ？」

明らかに嘘だろう、という口調で青木が声を挙げる。

俺は食堂内を見渡した。時間はちょうど正午を五分ほど回ったところである。が、食堂内には俺たちスタッフと同じくらいの数しか、客がいなかった。雨の日にはもう少し客数は増えるのだが、それでも満席にはほど遠い惨状である。

「信じられないのは当然だ。だが、これは本当のことだ」

そう言って食堂長は胸を張った。あんたの功績でもないだろうに。

「私は辞めるまでの間に、何とかこの社員食堂を昔のように盛り立てたいのだ。そこで、この社員食堂の大改革を敢行することをここに宣言する！」

食堂長一人がにこにこ笑い、俺たちは頭を抱えていた。

……とりあえず聞くだけは聞いてみることにしよう。俺は口を開いた。

「で、具体的にはどうするんですか？」

「うむ。そうだな。まずは値段を下げることから……」

「我が食堂の値段は周囲の店と比べても格段に安いですよ。何せ社員食堂ですから。それだけが取り柄です」

「そ、そうか。……ならば、味だ！ 味をよくしよう！ 最高級の食材を採り入れてだな……」

「今でも予算ギリギリで回してるんです。無理ですよ」

「な、ならばメニューの改善を……」

「何を始めるんですか？ フランス料理ですか？ パスタですか？ うちの社員食堂ですよ？」

「……………」

全員でため息をついた。だいたい、可能な範囲でのやれることは今までにほとんどやり尽くした感がある。残るは奇抜すぎて失敗するのが目に見えているアイデアか、先立つものを必要とする改善案ばかりだ。

「やっぱりダメか……………」

食堂長が肩を落として、寂しそうに呟いた。何を今更、と思わなくもないが、その姿にはさすがに哀愁を誘うものがある。

「ミナ、ナニシテルカ？」

厨房で作業をしていた黄さんがやってきた。黄さんは中国から出稼ぎに来ている方で、わざわざ日本で働いているだけのことはあって料理はとても上手だ。だが日本語が少し不自由で、あまり他の人とは喋りたがらない。

「おお、黄さんか！ いいところに来た！」

食堂長は諸手をあげて近づいていった。

「そうだ！ 中国人の黄さんなら、我々とはまた違った発想が生まれるかもしれない！ 何かないかね？」

「イタイ、ナノハナシテルカ？」

「この食堂を甦らせるのだよ！ そう！ その昔、この食堂が皆にとってなくてはならなかった時代のような、輝かしい食堂にしたいのだよ！ 黄さん！ 何か案はないかね！」

黄さんは奥から大量の蛍光灯を担いできた。

(完)

愛玩動物

【信号柱倒壊 犬の尿が原因か】

X日夕方、Y街で信号柱が部材の腐食から突然折れる事故が起きた。自転車で通りかかった通行人がその影響を受け、軽い怪我をした。

信号柱の腐食はおそらく犬の尿によるものではないかと考えられている。

【鳴き声により不眠障害 隣人刺す】

X日夜、Y市で傷害事件が発生。加害者は隣人宅で飼われていた猫四匹の夜鳴きにより一年以上に渡り不眠障害に悩まされていた。加害者は幾度となく隣人に改善を申し立てたが聞き届けられず、我慢ができず犯行に及んだ模様。

【十八歳巨乳美女 公園に全裸で放置】

X日早朝、Y町の公園で十八歳Fカップの巨乳美女が全裸で横たわっているのを通りかかった男性が発見した。

女性は全身を縄で緊縛され、自分一人では身動きできない状態だった。技巧の美麗さから、警察は何らかのプレイの最中か直後に放置されたものとみて捜査を進めている。

【女性にアザラシ移植 医師逮捕】

X市内のYクリニックにおいて、女性の胸部にアザラシを移植したとして医院所属の医師が傷害罪の疑いで逮捕された。移植されたアザラシは女性がペットとして飼っていたもので、移植は女性の希望によるものだった。

「小さい胸にコンプレックスがあった。アザラシを移植すれば胸が大きく見えるし、いつも一緒にいられるからいいと思った」

と女性は動機を語っている。

【ハムスター巨大化 テレビ塔倒す】

X日未明、Y県広域において巨大化したハムスターが暴れる事件が起こった。ハムスターはペットとして飼われていたもので、飼い主が毎日美食を与え続けたため肥大、巨大化し、飼い主の手にも負えなくなって戸外へ逃げ出した模様。ハムスターは県内でテレビ塔や重要文化財の城を損壊し、テーブルをひっくり返し、板前と女将を怒鳴りつけながら北上を続けている。

飼い主はハムスターにユウザンと名付けていた。

【厚生大臣 飼い主に苦言】

「そもそも人間の九割がろくでもない上、中でもペットを飼おうなんていう人間は輪をかけてろくでもない者が多い。己の躰も満足にできないのだからペットの躰なぞできなくて当たり前で、ペットよりはまず飼い主の方をこの世から処分した方がいい。そうすれば世の中も多少はよくなる。ヤツらこそアイ癌動物だ。目の癌だ」

(完)

頭蓋骨を捜せ

人間の骨格を求めて襲来した火星人は、手始めに頭蓋骨を奪っていった。

突如頭蓋骨を失った人間たちは驚き慌てた。転んだり、凍らせた豆腐の角にぶつただけで脳が潰れてしまうのだ。そそっかしい者から順に命を落としていった。島国のとある都市では、ツッコミ禁止条例が制定された。

頭部偽装を施していた者たちの生存率は高かった。彼らの多くは年長者で、大抵が重要な地位に就いている。そのため混乱は最小限に食い止められた。

事態を重く見た人々は頭蓋骨の奪回を計画した。仮の頭蓋骨として、常時装着可能なPC製のヘルメットが開発された。

ヘルメットと装甲服で文字通り身を固めた人々は、全力で頭蓋骨を捜し求めた。火星人を発見次第捕獲し、アブダクションしたりキャトルミューティレーションして何とか情報を引き出そうとしたが、もとより骨抜き火星人の心はやらへにやらと矛先をかわし続けた。火星焼きだけが大量に生産された。本場明石と比べても遜色ない美味さだった。

あれからどれくらい経っただろう。頭蓋骨の捜索は現在も続けられている。そしていつからか。人間の赤子は、PC製のヘルメットをかぶった状態で生まれてくるようになっている。

(完)

その他多数

その他多数には名前がない。

厳密に言えばあるのだが、それはその他多数にとっては名前ではない。その他多数が求めている名前というのは今持っているそれとはまた別のものだ。

X県のある郡では園田姓が十割を占めるという。親戚遠戚である園田さんも当然多くて、地域ぐるみで家族のような付き合いをしているのだという。一つの郡が一つの大家族で、彼らの名前が全員園田。つまりこれは園田多数である。園田限りともいう。

だがその他多数が求めているのはそんなものではなかったし、その場限りのものでもなかった。

自分は一個の存在なんだという証明。それがなければ、生きていくことはつらい。生きていくことは苦しい。その他多数がまだ生きているのは、名前を得たいという目的があり、そこへの道筋がまだ残っていると信じているからだ。その光明を失ったとき、彼らが世界にいるのかどうか。それは誰にもわからない。

彼らは名前を手に入れようと藻掻き、足掻き、精一杯に手を伸ばす。しかしもう少しで掴めそうだというその指先から、名前は容易に逃げてしまう。ソノツ、タタ、スーッと逃げてしまう。

だから、その他多数には名前がない。今日も明日も、名前がない。

(完)

「ですから、七十八センチCカップ以下の女性は入国できないのです」

入国管理局の係員は、さっきからそればかりを繰り返している。あたしは背の高い、ちょっとハンサムなその男を下から睨みつけ、今日何度目かの怒気を発した。

「バカなこと言うんじゃないわよ！ そんな……ムネの大きさを女性を差別していいと思ってるの！」

「しかし、我が国の法律ですから……」

そう。このチャバという国は、ムネの大きい女性しか入国・居住できないというおかしな国なのだ。

チャバは観光業が主な財源となっている小さな国だ。芸の国との二つ名がつくほど芸事が盛んで、国内には数多の劇場が軒を並べている。チャバ出身の芸人やタレントが各国で活躍していることからそのレベルの高さが伺えるだろう。

だから世界中から旅行者がこのチャバにやってくる。ある者は最高峰の芸を求めて。またある者は有名タレントの生家や記念館を見るために。

だがそんな素敵でチャバにも一つだけ、どうしても許せないことがある。それは、乳の小さい女性を認めない、ということ。

芸の国チャバによると、巨乳はそれだけで一つの芸なのだそう。だからチャバでは、巨乳の女性は大切にされる。またチャバの女性は伝統的に巨乳が多く、その巨乳遺伝子を保護するために非巨乳遺伝子はチャバの中へ入れないというのが国の方針なのだ。女性側から言わせてもらえばまったくふざけた話なのだが、実際にそんな理屈がまかり通っているのだから仕方がない。

この国は、そうして排除される人々の気持ちを少しでも考えたことがあるのだろうか。

「いや、ボクは微乳も好きなんだけどね」

誰もお前の好みなんて聞いてない。この変態。

「ともかく！ そんな理不尽な法律に従う気はないわ！ あたしはぐれ子様の記念館に行くの。さあ、そこを通しなさい！」

「ダメですってば！ 我が国にそういう法律があることは来られる前からご存じではずしょう。無茶を言わないでください」

「何でそんなバカな法律に従ってるのよあんたたちは！」

男は困ったように頭を掻く。でも本当に困っているのはこっちだ。ここまで来て、引き返せるものですか。

「そう言われてもねえ。どうしようもないんですよ。だから、ね。お嬢ちゃん。ここは一つ諦めて……」

怒りが頂点に達したあたしは男の臍を蹴飛ばした。

「どうしようもないのはこっちよ！ あたしに、どうやってそんなムネをつくれというの！ あたしはまだ九歳よ！」

(完)

しっぽ

猫舌猫カラダなので、熱い飲み物は苦手だが、冬は炬燵で丸くなる。アイツは犬カラダなので、雪の中でも元気に駆け回っている。何が楽しいのやら、皆目見当もつかない。

身体の一部を動物に見立て、分類して、それぞれの特色を見つけてみる。なかなか面白い遊戯だが、だからといって相手の心中までが察せられるわけじゃない。

というような話をアイツにしてみた。

しっぽがあるじゃないか。アイツの返答はいつも予想の斜め上をいく。大昔のエロい人も言ってるだろ。しっぽは口ほどにモノを言う。以しっぽ伝心。がんばれしっぽん。

しっぽん語の乱れは深刻だ。

尻を振りつつアイツは笑う。もちろんそこには何も見えない。見えぬけれどもあるんだよ。どこのみすずだオマエは。初代くにおくんの。わかるかボケ。

考えるんじゃない、感じるんだ。両掌を合わせて目を瞑る。何でもツッコんでもらえると思ったら大間違いだと思う。わからないよ。アンタが今何考えてるかなんて。

もしもそいつがあったとしてさ。それじゃアンタの、そして私の。

ついてるしっぽは、犬か、猫か。

いったいどっちだ。

(完)

あるまじきアルマジロ

楚人にアルマジロを売ぐ者あり。

「こちらのアルマジロの鼻は、とても鋭く、どんな盾でも貫き通す」

楚人は胸を張り、右手から一頭のアルマジロをぶら下げて、見物人に見せつけた。

「そしてこちらのアルマジロの甲殻はとてつもなく強固で、どんな槍の穂先をも弾き返すことができるだろう」

そうして左手で、丸まったアルマジロを掲げてみせる。

「ちなみに名前を、アルマ次郎という」

最前列にいた子どもが、鼻を伸ばしたアルマジロの方を指した。

「こいつの名前は？」

「アルマ……ゲドンだ」

余計な情報は付け足すべきではない。商売の鉄則だった。

「ところで」

後ろの方から老人が声を上げた。

「右のアルマジロの鼻で、左のアルマジロの甲殻を突けば、いったいどうなるかね」

楚人は額を叩いた。投げ捨てられたアルマジロは空中で三回転半捻りすると、楚人の前で器用に静止してみせた。十点、の聲が幾つも上がる。

「いけねえ。そいつは試したことがなかった。いい機会だ、一度やってみよう」

楚人が地面を叩く。二頭のアルマジロが丸まりを解除し、向かい合った。次郎は陰の構え。対するゲドンは陽の構え。

楚人は大声を張り上げる。

「さて皆々様。どっちに賭ける？」

(完)

スノーマンは眠れない

「つまりあなたは不眠症だということですね」

先生の白衣と同じような驚きの白さを保ったままスノーマンは頷いた。

「眠ろうとはするんです。でも、布団に入るとつい、例えば今年のクリスマスは彼女と過ごせるだろうかとか、仲間由紀恵の足りない部分をアンジェリーナジョリーで補えないだろうかとか、実は男性より女性の方がシモネタが好きなんじゃないだろうかとか、そもそもこういう場で一部の人間しかわからないネタ振りをしているものなんだろうかとか、色々なことを考えてしまって。それで、目が冴えて眠れなくなるんです」

スノーマンは布団派なのかと思いながら、先生はカルテを綴った。

「なるほど、悩み事がたくさんおありなわけだ」

先生が立ち上がった。

「だが、あなたが眠れない原因はおそらく悩み事とは無関係でしょう。別室で治療をするからついてきなさい」

そう言って足早に診療室を出ていく先生のあとを、スノーマンは丸々とした身体を重そうに引きずってついていった。

「先生、どこへ行くんですか」

不安になったスノーマンは聞いた。歩きながら半分だけ振り返った先生の顔はちょっぴり嬉しそうだった。

「あなたのような患者のためにつくったサウナ室ですよ。あそこでなら、ぐっすりと眠れるはずですよ」「この病院にはそんなものまであるのですか」

「ここには様々な患者さんがやってきますからね。先日はおはようからおやすみまで暮らしを見つめるのが苦痛になったライオンが来ました」

「CM ネタはいつ消えるかわからないから危険ですよ」

先生は立ち止まり、ドアを開いた。

「さあ、どうぞ」

先生に促されるようにして、スノーマンは室内に底を踏み入れた。後ろでドアがゆっくりと閉められる。

「すぐに暖かくなりますから」

スピーカーから先生の声が聞こえた。間もなく、スノーマンの身体の芯に、痺れるような感覚が湧き起こってきた。それは、初めての感覚だった。

「どうですか、気分は」

「とっても……気持ちいい……です……」

「あなたのワイフと比べてどうですか？」

「そりゃもううちの古女房とは比べものになら……もちろんワイフです」

「意識はまだはっきりしているようですね」

先生の声の調子が変わったような気がした。

「この星には温暖期と寒冷期が周期的に訪れるといわれています。そして今、どうやらこの星は寒冷期へと突入しようとしている」

身体の痺れが強くなってきた。先生の声が、やけに反響して聞こえる。

「今年の冬は、あなたが眠れないだけで済みました。だが来年の冬には、あなたをつくるものたちの存在そのものが、この星から消えているかもしれません」

先生の話、スノーマンは穏やかな気持ちで聞いていた。

いいんです、先生。僕は役目を終えて、こうして眠りにつけるだけで幸せなんだから……。

頭部が溶け落ちる直前、先生の優しい声を聞いたような気がした。

「おやすみ。せめて今宵はよい夢を……」

(完)

シンクロ

ピートと名付けられたすべての猫が夏への扉を探しているわけではないだろうけれども、僕のピートは確かに向こう側の世界を覗き込むのが好きであるようだった。

例えばある扉を開くと、その先には緑色をした砂で一面を覆われた丘が広がっており、その中心にダイヤル式の四脚テレビが鎮座していたりする。映っているのがルイツだったり、ジョセフソン姉妹だったり、タチバナだったりとそのたび変わってはいるが、テレビ自体はいつだってその景色の中にあるのだった。そしてひとたび砂嵐が来れば、画面もまたそれに同調するのだった。

彼は隙間を潜り抜け、砂嵐が止むのを待って、向こう側の季節が巡り、新しい世界が眼前に開かれるのを座り込んで待つ。時折長い鳴き声を上げる。そしてもう一度隙間を潜り、まだ次の季節が訪れていないのを確認するのだ。

彼だけではない。実を言うと僕も待っている。次の季節が、新しい季節が来ることを、心のどこかで期待している。

僕たちはいつだって、次の季節を探している。夏でなくてもいい。見知らぬ季節を求めて、彷徨っている。

いつの時代でも。どんな場所でも。

きっと、誰だって。

(完)

古来より、女人を船に乗せて海に出てはならないという。

なぜならば、女人に乗せた船は海神の怒りを買ひ、水妖に襲われる羽目に陥るからだ。

長らくの間、船乗りたちはその掟を守ってきた。だが、時は流れ。掟はいつしか忘れ去られ、男女平等を旨とする時代の変化も受けて、女人が海に出ることは珍しくなくなった。

その夜も、京都観光にやってきた女学生たちを乗せて、屋形船が湾内を回遊している。船頭にとってはいつもどおりの一晩だった。

ふと、おかしなことに気付いた。いつの間にやら、周囲を漂っていたはずの同業者たちの姿が、かき消えている。船頭の操る一艘だけが、湾内にぽつんと浮かんでいた。

何やらよくわからんが、まずい、と思ったときだ。

進行方向前方の海面が、持ち上がった。

無音だった世界にいきなり、おどろおどろしい音楽が流れはじめる。それにあわせて、前方の海面がせり上がってくる。

水が割れ、丸い頭が飛び出した。そのままずんずんとせり出してくる。

それは蛸だった。丸い頭の中に、ぎょろりとした二つの目と、飛び出した口がついている。実際にはあれは頭ではなく身体であったはずだし、口に見えるようなのも確か口ではなかったと思ったが、どうでもよかった。

その蛸は巨大であった。すでに頭部のすべてが海面に出ているが、それだけでもう、船の屋根に届かんとしている。

蛸はまだまだせり出している。なぜか、胴体のように見える部分に、トレンチコートを羽織っていた。

トレンチコートから雫を垂らしながら、大蛸は海上に姿を現した。部屋にいた女学生たちが「なにになにーどったのー」「なにあれーチョーキモーい」「妖怪が許されるのは明治時代までよねー」とか言いながら出てくる。みな浴衣姿で、いい加減にできあがっている。

蛸が嬉しそうに笑った、ような気がした。

曲の盛り上がりと共に、蛸がコートの前を広げた。

うねうねと動く触手。そしておぞましいものが、女学生たちの前に晒される。

女学生たちは黄色い悲鳴をあげる。だが、長くは続かなかった。

「えwちょwなにこれw」

「かー↑わー→いー→いー↓」

「デカいの顔だけとかwマジありえなw」

蛸の中身を指差しながらけらけらと笑っている。

BGMが止んだ。

大蛸は体色を赤く染めて、コートの前をかき合わせると。

ゆっくりと海の中へ沈み、姿を消した。

(完)

今日は何の日

その日会場へ行くと、タルバン星人がスーツを着て立っていた。

「……タルバン星人」

そう。『ベルトラマン』に出てきた、ベルトラマンに倒される悪役の、あのタルバン星人である。

タルバン星人は友人とおぼしきもう一人のタルバンと何かを言い合い、鉄を振ってふおふおふおと笑っていた。言葉は、勿論私には通じない。

横を見る。

そこにはメドロロン星人がいた。でこぼこのない顔のオレンジが非常に鮮やかだった。

周りを見渡す。他にもたくさんいた。メヒラス、ファイト、ズッポリト、チベル……あまり並べるとそっち系の人に思われてやばいと書くとそれはそれでまた語弊があるわけではあるが、とりあえずそういうことなので並べるのはこれくらいにしておくが、とにかく星人が、沢山ある、もとにいるわけである。

私は、今度は後ろへ振り向いた。

「……君」

「今日はセイジン式ですから」

私が何か言う前に、秘書は答えた。私は何も言い返さなかった。

「……ベルトラマンは来ないのかね？」

「何をリアリティのないことを言っているんですか。テレビの中じゃないんですよ」

何か間違っているような気がしたが、考えるのをやめた。頭が痛くなってきたからだ。

「……日本語は、通じるのだろうか？」

「さあ……。まあ、一番平易な日本語で、喋って下さい。ひょっとしたら通じるかもしれませんが。あと、彼らは非常に飽きっぽいので、手短に」

私は益々気が重くなった。が、やらねばならない。これは仕事なのだから。

私は壇上に立ち、上から一同を見回した。振り袖姿のチベル星人は不気味だった。気分を落ち着けてから、喋り始めた。

「ええ……」

その途端。空気が一気に緩んだ、ような気がした。

あちこちで、様々な星人語が飛び交った。光線や熱線も飛び交い、辺りは爆音に包まれた。私の話が終わったあとに振る舞われるはずであった酒に手をつけている星人もいた。

「何だ、何なんだ、これは！」

「ああ。だから手短に、とிட்டたのです」

「それよりも、こいつらは人の話を聞けない馬鹿ばかりなのか？ 異星人は我々より頭がいいと相場が決まっていたのではないのか？」

「一流大学に入っている人間も数名いるはずですが」

「……何の話だ？」

「いえ、ちょっとした戯れ言です」

そんなやりとりをしている間に、騒ぎは益々エスカレートした。私は壇上から叫んだ。

「何だ何だ、君達は！ それが星人の行いか！ 静かにして話を聞きなさい！ めでたい式典で浮かれるのはわかりますが、そういうのはあとで幾らでもできるでしょう！ いや、あとででも、一目で成人式帰りだとわかる服装でカラオケ屋やボーリング場やゲームセンターで暴れ回るのはやめなさい！ あれは非常に

みっともない！ 周りの人々から、こいつらのどこが星人だという目で見られているのがわからないのか、君達は！」

言い終えた瞬間、私の周囲に数本の熱線と光線が走った。後ろで秘書の悲鳴が聞こえる。

見ると、会場のスタッフも、皆星人どもに襲われていた。

「い、いったい何を……」

口を開こうとしたとき、横から殴られた。壇上に倒れ込む。目の前にはタルバンがいた。

タルバンはしゃがみ込み、小さな声で囁いた。

「今日がセイジン式だったのは、誰が決めた？ この国のお偉いさんだろう、うん？ もっと言うと、俺らをセイジンだと決めたのは誰だ。お前らだろう、うん？ 俺らには俺らのルールがある。俺らの中では、今日はこの国の滅亡記念日なんだよ。はははあ」

それは違う、と言おうとしたが、声には出なかった。タルバンの振り上げられた鋏。それが私の見た最後の光景だった。

(完)

「我らの存在が気付かれつつある」

集落に住む全員が集まり鮎詰め状態になった集会所の壇上で、長老はおもむろに切り出した。

一瞬の静寂のあと、そこかしこでざわざわと話し声が巻き起こった。その様を長老は高みから観察していた。

「静まれ、皆のもの」

制止の声を挙げたのは部族の若長だった。ざわめきが沈静化すると、若長は長老へと向き直った。

「それは人間に……ということですか？」

若長が真剣な面持ちで長老に尋ねる。長老は小さく頭を縦に動かした。

「先日、我らの星に人間の調査船がやってきたことは話したであろう」

全員の視線が長老に集中した。

「その調査船が今日、我らの星に水があったことをつきとめた」

「何と！」

集会所内が再びざわめきに包まれた。群衆の間から若長が一步進み出、長老に近づく。

「そんなバカな。地表の水は、すべて我々の集落に移したはず。人間たちの技術ではその痕跡さえ見つけられないはずです！」

「人間たちも進化したのじゃよ。それも我々以上にな」

長老の言葉はゆっくりであったが、語調は鋭かった。

「人間は我らの星まで探査船を飛ばす技術を身につけた。地表に水があった痕跡を見つけることくらい、たやすかろう」

「……つまり人間は我ら、マル・デ・タコと同程度の科学技術を身につけたということですか？」

長老は答えなかった。理解力のないものに若長はつとまらない。若長とて答えはわかっているはずだった。

彼らマル・デ・タコ……人間たちがいうところの火星人が、はじめて地球という星と人間という種族の存在を知ったのは三〇〇年ほど前。当時のマル・デ・タコと人間との技術格差は、三〇〇年以上の開きがあった。だがその三〇〇年間、彼らマル・デ・タコが種族として衰退していくのとは裏腹に、人間たちは技術的革新を成し続け、ついにこの火星文明に追いつこうとしているのであった。

「やはりあのとき、消しておくべきであったか……」

ス・ノモノという名の年寄りが、呟いた。この年寄りはその昔、地球で『おりんぴっく』なるものが開催されると聞いて、宇宙船に乗って地球まで観光に出かけたのだった。もちろん自分が人間ではないことは見破られないよう、光学偽装を行っていた。だが、『いぎりす』という国に滞在したときに出会ったウェルズという名の変人は、当時研究していた透明人間発見装置なる機械で光学偽装を看破し、ついに彼の正体を突き止めてしまったのであった。

「あのときあの人間を殺していても、現状は何も変わらなかったと思いますわよ。だってあの人間がしたことといえば、自分の見たものをネタにして小説を一本書いただけですもの」

「ス・ノモノ夫人の意見は正しい」

長老は二本の触手で器用に持っていた杖で地面を叩いた。

「問題は、眼前に迫っている脅威にいかにして対処すべきかということじゃ」

集会所には沈黙が訪れた。この事態をどうやって打開するのか。良案のあるものは一人としていなかった

た。

「長老」

不意に、集会所の入り口付近にいた少年が、触脚を忙しく回転させて長老の前までやって来た。その触手には黒い箱が抱えられていた。

「おお、これはこれは。ト・ランジスタの大使殿」

少年に抱えられていたのはト・ランジスタ、木星に住んでいる種族の大使であった。ト・ランジスタはその生命情報をデータだけで保持している種族で、物理的には高周波でのみ構成されている。だがそれでは対外的に何かと不便なので、会話と、今そこに存在していることを示すためにこのような金属製の箱に入っているのだった。

「聞きましたぞ。何でも人間が、とうとうこの星まで調査船を飛ばしてきたとか」

「ええ。まったくもって困ったことです」

長老はない眉をしかめた。

「で、何か対策はお採りになったのですかな？」

「それがまだ何もよい案が浮かばず、どうしようかと思案しておるところです」

大使はさもあらんというふうに頷いた、ように見えた。ト・ランジスタの感情は振動の波となって表れるのであるが、これは一部の慣れたものしか捉えることはできなかった。

「そうであろうと思いました。そこで本日は、マル・デ・タコの皆様にこの苦境を脱出するためのアイデアを一つ、持って参りました」

長老と若長、そして彼を抱えていた少年までもが目を見開いた。

「……して、そのアイデアとは」

「なに、大したことはありません。地球に移住するのです」

大使の言葉を聞いたマル・デ・タコたちは息を呑んだ。しばらくそのまま硬直していたが、真っ先に正気を取り戻した若長がすぐさま箱に掴みかかった。

「どんなアイデアかと思ひ聞いてみれば、バカなことを！ 貴様ら、何が目的だ！」

「お、落ち着いてください！ よくよく考えた上で出したアイデアです！」

「よく考えた上で出しただと？ ト・ランジスタは理知的な種族だと思っていたが……どうやら間違いだったようだな！」

「ではこのまま衰亡してゆくおつもりですか？」

その言葉を聞いた若長は、動きを止めた。

「……どういうことだ？」

「あなたがたマル・デ・タコは種族として衰亡期にある。いや、あなた方だけではない。我々ト・ランジスタとてそうです。それに引き換え、人間はまだまだこれからの種族です。一〇〇年後にどちらの種族が生き残っているか、自明の理と言えましょう」

「だから地球に移住し、人間と共に生きよというのか？」

大使は頷く振動を發した。

「このまま発見されれば、人間とあなた方との間で争いが引き起こされるのは間違いないでしょう。ですが、あなた方が発見される前に地球に移住し、密かに地球上の生命体と混じっていけば、争いを起こさず、地球の命がつきるまでひっそりと生きて行くことができる」

大使の言葉に、反論できるものはいなかった。人間と戦うとなれば、勝利したとしても少なからぬ犠牲が出る。個体数が急激に減少しつつあるマル・デ・タコという種族にとって、それが致命傷となることは疑い得ないことだった。

「……一つだけ教えてください」

長老が若長の隣に進み出た。

「大使殿のご意見、もっともですじゃ。だが、なぜそれを我らに教えてくれるのですかな？ 我らにそれを教えて、ト・ランジスタにとっていったい何の得があるのです？」

長老の言葉を聞いた大使はしばらく振動を止めていたが、やがて決心したように振動を再開した。

「……実は我々ト・ランジスタも、木星を放棄して地球へ移住しようと計画しております」

大使は語りはじめた。

「人間はこの星まで手を伸ばしてきました。さらに技術が発展すれば、我々の星にも探査船がやってくることは、まず間違いないでしょう。遅かれ早かれ、我々もあなた方と同じ事態に直面することになる。だからこの際は人間と共に生きようと、我々はそう決心したのです」

大使の言葉を、マル・デ・タコたちは驚きの表情で聞いていた。

「しかし、そのようなことが可能なのか？」

若長が尋ねると、大使は自慢げな震動を発した。

「すでに先遣隊を地球に送り込んでおります。あるものはラジオとなって毎日人間に向かって放送を流し、あるものは消防車のサイレンとなって人間の消火活動を助けています。DJやミュージシャンになったものもあります。テレビに出られないのが残念と申しておりましたが、それ以外では楽しく人間と共存しているそうです」

「何と、そこまで……」

長老は呻いた。ト・ランジスタは再び自慢げな振動を発した。

「我々ト・ランジスタは、裏付けなしにこのようなこのようなアイデアを提供したりはいたしません。ですが、我々だけで新天地へ移住するというのは、何とも心許ない。そこでここは一つ、親愛なるマル・デ・タコの皆様にも我々と共に開拓者となっていただきたい。そのように希望する次第です」

静けさを取り戻していた集会所内が、再びざわつきはじめた。大使のアイデアに乗るべきかどうか、あちこちで議論がはじまった。辺境といえども宇宙海賊などの驚異がゼロというわけでもない。もし移住を実行に移すのであれば、できるだけ多数が固まって移動する方が危険が少ないのは事実なのであった。

若長は考えを巡らせていたようだったが、やがて毅然とした表情で大使に向き直り、触脚を折った。

「ト・ランジスタの皆様がそこまで考えておられたとは。先ほどの無礼、ひらにご容赦ください」

「ということは……」

若長は頭を上げ、視線を黒い箱に注いだ。

「我々マル・デ・タコ総員、ト・ランジスタの皆様と共に地球に赴きたいと思っております」

「最近、タコが多いっすねえ」

船に乗って今年で三年目になる権造は、網を引き上げながら漁船長に話しかけた。

「マルデタコだろ。最近こらでよく揚がるんだよ。結構美味しいぞ」

「火星ダコって呼ばれてるらしいっすね。何でなんすか？」

「ああ。外国の何とかって作家が書いた火星人が出てくる小説があつてな。そいつの挿し絵で描かれていた火星人にそっくりなんだと」

「へえ。でもこいつ、獲れはじめたの最近だつて聞いたんすけど」

「ああ。昔は見たことなかったなあ。ここ二、三年だろ。見られるようになったのは」

「本物の火星人が火星から逃げ出してきたとか、ないっすかね」

「バカ言っただけで早く網揚げろ。あとがつかえてんだ」

引き上げられた網の中には、たくさんの魚介類に混じってやたらと足の細長いタコが数匹、ぐったりと横たわっていた。

(完)

外れた町

諸般の事情から工場の誘致先が抽選となり、我が町が当たりくじを引き当てたのが始まりだった。

我が町と、隣接する三つの町は長らく赤字財政に悩んでおり、このたびの工場誘致は現状から脱却するための起死回生の一手であった。当然、どの町も総力を挙げて獲得を目指し、その結果、いくつもの不正が明るみに出た。最終的に抽選となったのは、そういう経緯があつてのことだった。

当初より抽選に反対していた、まだしも資金繰りに余裕のあつた隣町は、この結果に納得せず。他の町どもと結託し、我が町を攻撃し始めた。特産品の葱と大根を手に入れた我が町の町人を襲撃し、それらの農産物を尻の穴に突き刺すという蛮行を繰り広げた。人の自尊心と守りたかつた何かをズタズタに傷つける、悪魔の所業である。また個人的な見解だが、葱はともかく大根はいくらなんでもあかんやろ、と話を耳にしたときは思ったものだ。特に隣町の大根は、「太くておっきい！」が売り文句なのである。察していただきたい。

そういうわけで、抽選日から三日と経たずに気分はもう戦争、我が町とその周辺は紛争地帯もかくやという有様だった。

迷彩服を着込んだ男たちと、旧ナース服、チャイナドレス、アオザイを身に纏った女たちが、反撃を開始した。我が町は化繊の町である。これらはただ在庫が過剰に余つていたもので、他意はない。もちろん我々職員の趣味などが反映されているわけでは、決してなかった。

戦線は膠着した。我が町には工場の親会社から救援物資が届いたが、何せ敵方は三つの町であり、しかもそれらは、我が町をぐるりと取り囲んでいる。我が町としては、不利な三面作戦を展開せざるを得なかったのである。

だがついに、我々の精鋭部隊が一番勢力の弱い町を制圧し、巨乳美女だけを選びすぐって捕虜とすることに成功した。その夜は、町を挙げての祝いの宴が開かれた。

戦力バランスが、大きく崩れた。間もなく争いは終わる、誰もがそう思い、そしてそれは、現実となった。

翌日。誘致されるはずだった工場の親会社が倒産し、更生法の適応を申請した。

(完)

ドミノの時代

レとファとラとシの音が出ない世の中になって、どれくらい経つだろう。

はじめはレの音だった。それはほんのちょっとした変化で。耳聡い幾人かが、何だか不便になったな、と。そう思うくらいのものであった。

そのうちファの音を耳にしなくなり。ラもシも次々閉じられて。

気付いてみればいつの間にやら。いくら耳を澄ましてみても、ドとミとソの音しか聞こえてこない。

昔は一冊にまとまっていた楽譜も今では三分冊され、なのにどこを開いてみても、同じに見える。目に留まるのは二つの記号。

「あなたはこれをしてはいけない」

「あなたはこうしなければいけない」

三音しか発音できない人々の言葉は平坦になり、聞き取れず、すれ違い、些細なことでの殴り合いがはじまる。

耐えられなくなった一人が、ぱたりと倒れる。それを目にした次の一人が、ぱたり。

ぱたりぱたりと倒れて行って。最後はどこに、たどり着くのか。

人々はただ順番を待ち、列を成す。屍を誰も、越えてはいかない。

(完)

バレンタインズ 11 (イレブン)

二〇〇X年、二月、十四日。その日、義利家は戦場と化した。

持ち運びに便利な軽量ラジカセからスパイ大作戦のメインテーマが流れている。ラジカセの置かれた古いワゴンの中には三人の男性がいた。三人とも見るからに安物のヘッドセットをつけ、色々なキーやスイッチのついた機材の前に座っている。リーダー格とおぼしき男がマイクに向かって口を開いた。

「アルファよりチャーリィへ。そちらの準備はどうだ」

「万全だ。いつでもいけるぜ」

スピーカーからかすれた音声で返答がある。それを聞いた男は残りの二人に細々と指示を出す。

「オーケー。三十秒後に作戦を開始する。合図があり次第突入を開始せよ」

「了解（ラジャー）。ところですぐ横に干してある白のパンティーとブラもゲットしておきたいんだが」

「今回の目的は下着ではない。却下する。相手は百戦錬磨だ。どこに罠を仕掛けているかわからんぞ。軽率な行動は慎め」

「……了解」

男は機材のつまみを捻ると再びマイクに話しかけた。

「アルファよりブラボーへ。行動を開始してくれ。迅速に、しかし確実に、だ」

「了解」

通信が切れるとバンの外にいた二人組が目の前にある典型的一戸建て家屋へと歩き出した。表札は「義利」となっている。間違いない。学校の男子生徒全員のアコガレの的である義利チヨコちゃんの家だ。

二人組のうちの一人が震える手でインターホンを押す。メンバーの中でも度胸のあるものをこの役に当てたが、それでもやはり緊張の色は隠せないようだった。

ドアが開いて母親らしい女性が出てきた。娘に似て母親も美人だ。俺はこっちでもいい、とリーダーは思ったが、様々な誤解を産みそうなので口には出さなかった。

「こんにちは。あの、義利さんいらっしゃいますか」

二人組が声を振り絞ってそう用件を伝えると、母親は玄関口から娘の名前を呼んだ。

よし！ リーダーとワゴンにいるメンバーたちは軽くガッツポーズを決めてみせた。

「アルファよりチャーリィへ。フタガミヤマノボレ。繰り返す、フタガミヤマノボレ。突入を開始せよ」

「了解。ただいまより突入を開始する」

庭に潜んでいたチャーリィ隊のリーダーが手を振ると後ろに控えていた五名が一斉に二階ベランダによじ登り、突入を開始した。全員を見送ったリーダーも一番後ろについて続く。リーダーのポケットはなぜか少し膨らみ、すぐ側の物干し竿から純白の下着一組が消えてなくなっていた。

「ベランダのガラス戸を開け、部屋の中へ突入する。メンバーはそれぞれ痕跡を残さぬよう静かに、しかし迅速に部屋の中の物色をはじめた。

「いいか。目的のものはブツだけだ。他の者には一切手を触れるな」

自分のことを棚に上げ、リーダーはそう厳命する。メンバーはしぶしぶながら熊のぬいぐるみやパジャマや制服などを元の場所へ戻した。

一階でも熾烈なバトルが繰り広げられていた。

「で、結局何の用なの、あなたたち」

「いや、その……」

しどろもどろになる二人組を学園のアイドルは厳しいジト目で睨み付ける。胸の下で組んだ腕が、見事な二上山を持ち上げていた。

「ははあん。今日はアノ日だもんね。どうせあなたたちもアレが目当てなんでしょ。違う？」

「はは……。ま、まさかあ」

とか言う割に視線が泳いでしまうのはまことに情けない。一人が隙を見計らってマイクに囁いた。「ブラボーよりアルファへ。これ以上の精神的重圧には二人とも耐えられそうにない。もう、我慢の限界だ。撤退する」

それを聞いたアルファリーダーは、ヘッドセットを叩きつけた。

「なんて根性のないやつらだ！　せっかく学園のアイドルと話せる機会を与えてやったというのに、情けない……」

「というか、こんな機会貰っても嬉しくもなんともないでしょうが……」

メンバーの言を無視してアルファリーダーはヘッドセットを被り直した。

「アルファよりチャーリィへ。フタガミヤマクダレ。直ちに撤収せよ」

返ってきたのは悲痛な叫びだった。

「待ってくれ！　まだブツが発見できないんだ！　かなり巧妙に隠しているらしい。あと三十秒！　三十秒猶予をくれ！」

「駄目だ！　ブラボーが撤退した。すぐにフタガミヤマがそちらへ上がる。撤退しろ」

「イヤだ！　ここまで来て発見できなけりゃ水の泡だ！　俺は諦めないぞ！」

「こだわっている場合か！　見つければ俺たち全員命取りだ！　撤退するんだ！　また来年がある！」

「イヤだ！　来年がある、来年がある。そういい続けてここまで戦果ゼロを続けてきたんだ。もう、俺はこれ以上耐えられない！　頼む！」

「……………」

その叫びは魂の叫びだった。

「あと十秒だ。それ以上は待てない」

「了解！　話がわかるぜ！」

通信が途切れた。

ブラボーの二人組がワゴンに乗り込んでくる。運転手がイグニッションを回した。無免許のくせにやけに手慣れている。

アルファリーダーは機材の上で両手を組んだ。十秒がとても長く感じた。

「あった！　あったぞ！　ブツを見つけた！　クローゼットの奥の隠し部屋だ！」

スピーカーから声が流れた。歓喜の叫びだった。

「よし、撤収だ！」

「了解！」

六人全員が引き上げたのと、義利ちゃんが部屋のドアを開けて入ってきたのはほぼ同時だった。

六人がワゴンに駆け込むと、運転手は一気にアクセルを踏み込んだ。

「やった、やったぜ！」

十一人は皆手を叩き合って喜んだ。バレンタインズイレブン。バレンタインに目標の女の子からチョコレートを奪うために結成された、特殊工作チームだ。そして彼らは、その存在意義を完全に果たしたのである。

「さて、それじゃあ早速開けてみるか」

アルファリーダーが包みを手にとった。赤いリボンと包装紙で装飾されたそれを二十二の瞳が見つめる。

包みが開いた。出てきたのは大きなチョコレート。

そして、それは手作りだった。

そして、そこにはこのように記されていた。

『アキラくん、大好き』

名前入りだった。そして、ホワイトチョコで記されている名前と同名の一名を除くメンバー全員が、そのアキラを睨み付けていた。

この事件以来、再びバレンタインズ 11 が結成されたという話は聞かない。

(完)

バレンタインズ 12 (トゥエルブ)

江坂が三国に逢ったのはほぼ一年ぶりのことだった。

「三国？ お前、三国なのか？」

「それ以外の誰かに見えるか？ 江坂」

江坂の記憶が正しければ、三国は下着泥棒で捕まり、警察のお世話になっていたはずだ。

「久しぶりだな。いつ出てきたんだ」

「拘置所には入っていない。初犯だったから説諭で帰してくれたんだ」

三国が初犯どころか下着ドロの常習犯であることは、仲間たちだけが知っている事実だった。

「それで、何の用だ」

「あの日が近づいているんだ。決まっているだろう」

江坂はナツミカンスピリットを一本くわえると、火をつけた。

「今度は何を盗む？」

「もちろんチョコレートだ」

持ち運びに便利な軽量ラジカセからスパイ大作戦のメインテーマが流れている。狭いワゴンの中には三人の男。安物のヘッドセットをつけ、色々なキーやスイッチのついた機材の前に座っている。彼らにとっては見慣れた光景だった。

「アルファよりチャーリィへ。そちらの準備はどうだ」

「万全だ。いつでもいけるぜ」

スピーカーから返ってきた言葉まで以前と同じだ、とアルファこと江坂は思った。江坂の隣りに座る南方がバンドを調節し、感度を良好にする。この一年の間に、南方は趣味の盗聴技術と共に無線の操作技術も飛躍的に向上させていた。

「アルファよりブラボーへ。行動を開始してくれ。迅速に、しかし確実に、だ」

「了解（ラジャー）」

やはり以前と同じやりとりを繰り返し、作戦は始動した。

目標は、町内一の巨乳美女と噂の小張トウコのチョコレートだ。

三国、淀屋、田辺のスリーマンセルがオートロックの自動ドアへ、音を立てず近づいていく。淀屋は大学では野球部、田辺はラグビー部に所属している。彼らの身体能力にベテラン三国の技術が加われば潜入できない場所はない、と江坂は思っている。ちなみに彼らの所属している二つの部は、現在集団痴漢行為が発覚して活動停止中だ。

三国がオートロックに正確なパスコードを打ち込み解除する。パスコードは事前に南方が抜き出していた。この辺りの準備は、抜かりない。

「解除したぞ」

「よし行け。88888 号室だぞ」

三人が非常階段を上がっていく。それに連動して、ビルの裏側からは守口、中崎、鶴見が仕掛けたロープを伝い、ベランダへの侵入を開始する。入り口と裏口。不測の事態に備え、両方から仕掛けるのが江坂のやり方だった。彼ら三人は学生時代から覗きとクライミングの名手として慣らした男たちだ。この程度のことは朝飯前だった。

「ブラボーよりアルファへ。ターゲットは室内にいる模様。どうする？」

「何だって？」

おかしい。この時間には、小張トウコは短大へと行っているはずだ。

南方から提出されたデータに素早く目を通す。小張トウコは真面目な性格で、この日この時間の講義は一度も休んだことがない。

「ブラボーよりアルファへ！ 緊急事態だ！ ターゲットは我々の行動に感付いている！ あのアマ、用心棒を雇い……うわあっ！」

三国の断末魔がスピーカーを通じてワゴン中にこだました。江坂と南方、ドライバーの森ノ宮が同時に耳を塞ぐ。

そして、スピーカーが伝えるのはただの砂嵐になった。

「……いったいどこから漏れたんだ」

森ノ宮が呻く。蒲生のヤツだ、と江坂は感付いた。前回のミッションで、イズミとの両想いが発覚した蒲生。当然のごとく江坂たちは蒲生を袋叩きにし、盗撮、覗き、痴漢などヤツが今まで行ってきた悪行を町中に公にした。裏切り者に対する鉄の制裁だ。

ヤツがそのことを恨んで、俺たちの先回りをし、ターゲットに情報を漏らした。考え得ることだった。そもそもこの町内で江坂たちと同等に張り合える男といたら、ヤツしかいない。

「アルファよりチャーリーへ。ブラボーがやられた。突入を急いでくれ」

「今ベランダに取り付いた！ 普段着用のブラを発見！ ちくしょう！ こいつはどう見てもBカップだ！

あの女、パットをつけてやがった！」

「……情報管理が甘かったか」

江坂は昨年末に盗撮した小張トウコのミニスカサント姿を思い浮かべた。あのときに、胸の張り出し方が少し不自然だとは思っていたのだ。

江坂はヘッドセットの位置を直した。

「アルファよりデルタへ。君たちの出番だ。頼む」

植え込みで待機していたデルタチームが自動ドアを抜け、高層マンションのビル内へ消える。デルタチームの平林は空手二段。九条は柔道と合気道初段。チームの中で最も危険な二人だった。

「俺も出る。南方、森ノ宮。バックアップを頼む」

二人が驚いたように江坂を見た。

「江坂さん。どうしてあなたまで」

「三国はともかく、淀屋と田辺がやられたとなると、用心棒は相当の手練れだ。あの二人だけでは不安だ」

引き留めるような南方の視線を無視して、江坂は覆面をかぶった。

「引き上げるべきだ、江坂。いつものあんたなら、情報が漏れていたと気付いた時点でそう思うがね」

森ノ宮が煙を江坂の覆面に吐きかける。江坂は顔の前で掌を動かした。

「前回、三国が言ったことを覚えているか？」

江坂は二人の瞳を睨み返した。

「三国は言った。来年がある、来年がある。そう言い続けてここまで戦果ゼロを続けてきたんだ。もう、俺はこれ以上耐えられない……と」

二人は無言で江坂の言葉を聞いていた。

「あのときの三国の言葉があったから、俺たちはミッションをやり遂げることができた。あの一言があったから、今の俺たちはあるんだ。誰一人この世の中に絶望することなく、生きていけているんだ」

江坂はエアガンを抱え、安全装置を解除した。

「世間は俺たちのことを変態だの犯罪者だのというだろう。だが、これは俺たちの生き甲斐だ。俺たちの生

きている証なんだ」

ワゴンのドアが開け放たれた。

「社会からは抹殺されようとも、魂は死なない。俺は、行く」

ドアが閉ざされた。灰色の巨塔へと歩いていく江坂の後ろ姿を、四つの瞳が眺めていた。

「……やるしか、ねえか」

「そうですね」

88階にたどり着いた江坂が見たのは、この世のものとは思えない光景だった。

リノリウムの床に、淀屋と田辺が倒れている。完全に昏倒しているようだ。そして、傷だらけの平林と九条が片膝をついて、虫の息で立っている。そして88888号室の前にはいるのは。

「……タコ？ いや、火星か！」

南方のデータに、小張トウコの趣味が宇宙との交信とロズウェル巡りとあったのを思い出した。

火星人が八本の触手のうちの六本を伸ばし、平林と九条を攻撃する。合気道の使い手である九条が必死で防御するが、鞭のようにしなる触手はつかみどころがなく、二人はさらに傷を増やした。

「平林！ 九条！ 援護する！」

江坂はエアガンをフルオートで撃ち放つ。火星人は弾幕を三本の触手で払い抜けると、江坂に突進してきた。

「ちっ！」

伸びてきた触手をバックステップでかわす。だが、左側からフック気味に出てきた別の触手の直撃を受け、江坂は壁に叩きつけられた。

スピード、パワー共に地球人とは桁違いだ。それに、この変幻自在の触手。淀屋たちがやられるのも無理はない、と江坂は思った。

首筋に火星人の触手が巻き付く。そのまま持ち上げられた。息が詰まる。

これで終わりか、と薄れ行く意識の中で江坂は思った。

江坂を覚醒させたのは、耳元で響いた南方の叫びだった。

「チャーリー、ベランダより室内への侵入完了！ ターゲットはチャーリーに気付き、現在ベランダへ！
今がチャンスです！」

88888号室のドアの向こう側から、女性の叫び声が聞こえた。火星人の意識がそちらへ向く。

江坂は隙を逃さず、火星人の顔面にほぼ零距离でエアガンを連射した。

火星人は意味不明の叫びをあげた。

「おりゃあッ！」

平林が最後の力を振り絞り、渾身の正拳突きを放つ。その一撃を受けた火星人は、ついに床に倒れ伏した。

江坂はふらつく足を動かし、壁を伝って88888号室のドアに手をかけた。ドアは音もなく開き、ピンクと白が多くを占める内装が目飛び込んできた。

靴も脱がず絨毯に足を踏み入れる。左手に見つけたタンスの下から二段目を開くと、様々な色合いの女性下着と共に焦げ茶色の箱が仕舞われていた。

江坂は箱もるとも、下着を両手いっぱい抱えた。ヘッドセットは、何とか江坂の頭にくっついていて。

「アルファより総員へ。ミッションクリアー。総員撤退せよ」

ワゴンに詰め込まれた十人の男たちは、互いに何度もハイタッチを繰り返していた。

喜びを共有し、チョコレートの小箱と下着の山を中心にひとしきり盛り上がったあと、江坂は淀屋と田辺に尋ねた。

「ところで、三国はどうした？」

二人は顔を見合わせた。

「さあ……。俺たちよりは長くヤツの攻撃に耐えていたはずだが……。江坂も知らないのか？」

「俺たちが着いたときには、お前たち二人しか転がっていなかった」

平林が言うと、九条も頷いた。

「これが、アブダクションというやつか」

ム一民でもある鶴見の一言に、皆が妙に納得した。ム一民というのは怪しい科学雑誌を購読している人々の総称のことだと、宇宙から解説が入った。

あいつならどの星に行っても己の生き様を見つけるだろう。江坂はそう思った。

ワゴンが四つ辻を左折した。

「ちょっと停めてくれ」

江坂が森ノ宮に指示した。森ノ宮がブレーキをかける。

「やり残したことを思い出した。先に行っておいてくれ」

そういい残すと、江坂はワゴンのドアを開け、飛び降りた。

後方から質問の声が飛んでくるが、無視して歩みを進める。一軒の家の前で足を止めた。

表札を見る。イズミと記してあった。そして、門の前には一人の男。

「三国……。いや、蒲生」

振り返った男の顔は、三国。そういえば三国と蒲生は顔つきがよく似ていたと思い出した。

「さすがは江坂だ。いつ気がついた？」

にやけた笑い顔を崩さず、蒲生は問いかけた。

「情報が漏れていたとわかったときだ。お前が本気で復讐を考えるなら、整形くらいは厭わないだろうと想像した」

「どちらにせよ、蒲生のままではこの町で生きていけないからな。お前たちのおかげで」

顔は笑っていても、その奥の目は笑っていない。

「本物の三国はどこだ」

「拘置所の中さ。下着泥棒で捕まったという噂は本当だ」

最初からすべて仕組まれていたということか、と江坂は苦々しく思った。

「しかし、なぜなんだ蒲生。復讐をしたいだけなら、こんな手の込んだことをしなくても……」

「またやってみたくなったのさ。ミッションを」

蒲生はイズミ家を見上げた。

「ひりつくようなスリル。あれをもう一度、感じてみたくなったんだ。お前たちと……。そして俺自身の力を、もう一度試してみたかったんだ」

江坂はただ蒲生を見ていた。こいつも俺と同じだ。俺たちと同じだ。自分の生きる道を、探している。自分の生きた証を、どこかに残したがつている。

そしてこいつの生きる道を、俺たちは奪ったのだ。

「俺たちは……。十一人じゃなく、十二人でミッションをこなしたんだな」

「ああ。バレンタインズトゥエルブ、だ」

ナツミカンスピリットの箱を取り出し、一本くわえる。ライターで火をつけようとするが、指が震えて思い通りにいかない。

「俺たちの力はどうだった」

「予想以上だったよ。楽しませてもらった」

予想以上だったのはお前の頭脳だ、と江坂は心の中で言い返した。

蒲生が身を翻した。背中が遠ざかっていく。

「また……俺たちと組む気はないのか？」

背中に江坂は問いかけた。

蒲生が右手を挙げた。その手には、焦げ茶色の小箱が掴まれていた。

「気が向いたら、な」

蒲生は自らの道を歩き出した。小さくなっていくその背中を、江坂はただ見つめ続けていた。

(完)

バレンタインズ 13 (サーティーン)

暗い部屋だった。黄色みがかかった電灯一つだけが部屋の中を照らしている。窓にはブラインドが取り付けられ、それが外部からの光を遮断している。部屋の中には二人の男がいた。お互いの姿は見えるが顔は見えない。そのように調整されているようだった。

「ではもう一度だけ、君の意思を確認しよう。君は……本気で、あの女の胸を揉みしだく勇気があるかね？」

「俺の覚悟に変わりはない。この手にきつと、あの胸を掴んでみせる」

問われてから男が答えるまでに間はなかった。その速度が、男の決心の固さを表していた。

もう一人の男が口を開いた。静かに。厳かに。

「……よかろう。君を同志として迎えよう、千里君」

男が指を鳴らした。ドアが開かれ、二人の男が部屋に入ってくる。一人がライトのスイッチを入れ、もう一人がブラインドを上げた。

千里の前に、男の顔が露わになった。男は優しげな微笑みを浮かべていた。

「リーダーの江坂だ。今回の作戦、君の活躍に期待している。よろしく、千里君」

持ち運びに便利な軽量ラジカセからスパイ大作戦のメインテーマが流れている。狭いワゴンの中には三人の男。安物のヘッドセットをつけ、色々なキーやスイッチのついた機材の前に座っている。いったい何度目になるだろう。彼らにとっては見慣れた、あまりに見慣れすぎた光景だった。

大きく違うのは、最初に集まったときには学生だったメンバーの、その多くが社会人になったことだろう。それと、彼らに対する世間の目だ。

ここ数年。この地区では女性に対する軽犯罪と性犯罪が相次いでいた。スカートめくり。乳揉み。性器露出。盗聴。覗き。いたずら電話。ストーキング。ときには窃盗という大事件もあったが、盗まれているのはいつも女性下着だった。

警察の調べで、それらが単独犯ではなく、複数の人物による犯行であると判明した。そして彼らには横の繋がり、つまり一種の犯罪組織的な繋がりがあるのではないかと警察は考え、地元マスコミもその判断を支持した。

バレンタインズ。地元マスコミはその軽犯罪組織集団をそう名付け、新聞などでその呼称を使用した。ここ数年二月十四日に連続発生しているチョコレート窃盗事件。それらも同じ一味の仕業であると断定したのだ。

千里が加わった江坂をリーダーとするこの集団。それこそがまさにそのバレンタインズだった。

靴二足を履きつぶす地取り捜査の結果、とあるマンションの一室に江坂名義の事務所が入っており、そこがバレンタインズの本部基地であると突き止めた。ある程度の証拠は固められており、踏み込むことは容易だったが、その場合は首謀者の江坂のみの逮捕で終わってしまう可能性が高かった。

可能であれば一味を一網打尽にしたい。それが上の意向だった。

考え得る手段は少なかった。経歴に偽装を施し、目立つような形で痴漢行為や下着窃盗を彼らの縄張り内で繰り返した。被害者には豊かな胸の持ち主が多く、手元に集まった女性下着は一番小さなモノでも七十のDだったが、それは単純に実行者の趣味を反映しただけだった。

そうしているうちに、接触者が現れた。バレンタインズを尊敬(リスペクト)している。男にはそう答えた。

そしてバレンタインの一ヶ月前。千里は組織への潜入に成功したのだった。

「アルファよりチャーリィへ。そちらの準備はどうだ」

「万全だ。いつでもいけるぜ」

ハンドサインがチャーリィからブラボーへ。ブラボーからもオーケーのサインが返ってくる。全員が、黒や紺、深緑といった目立たない色のスウェットを着込んでいた。集団ならともかく、単独であれば発見されても怪しまれない、それでいて動きやすい格好だ。首からは音楽プレイヤーに偽装したイヤホンマイクがストラップで提げられている。これはメンバーの鶴見がつくったものだ。

「もう一度確認しておく。今回の目標は人目につきやすい場所にある。覆面は部屋への突入前まで身につけないこと。スリーマンセルでの行動になるが、可能な限り同一集団であると見えるような行動は慎むこと」

「田辺は一人でも目立つけどな」

「僻むなよ守口。どこがデカいかの違いだけだろ？」

メンバー一長身の田辺と小柄な守口が軽口を叩き合う。守口の趣味はいわゆる全裸にコートを羽織った痴漢行為で、その造型と大きさに関しては、メンバー中随一でもあった。

「今回の目標（ターゲット）は、今までで最も凶暴な女だ。だが、最もゴージャスな女だ。リスクが大きいほど」

「見返りも大きい」

「すべてのバレンタインに鉄槌を。後世の者は我々の活動を呼ぶだろう」

江坂の言葉が途切れた。今度は、軽口は聞こえなかった。

「血のバレンタイン、と」

それが合図だった。三国、淀屋、中崎のスリーマンセルが音もなくマンションの入り口に近付く。入り口は高級マンションの例に漏れず電子ロックになっている。三国が素早くキーを叩くと、ドアがスルリと開いた。コードの解析はワゴンで通信を担当している南方の仕事だった。

わずか十秒で、ブラボーチームがマンション内部へと消えた。

彼らの手際がプロフェッショナルと呼んで差し支えないことに、千里は舌を巻いた。個々の専門技術だけを見れば、千里が本来所属している組織の専門家よりも上かもしれないとも思った。

「行くぞ、新入り（ルーキー）」

田辺の声で我に返った。ここで怪しまれてはまずい。今少しは千里も全力で計画を遂行する必要があった。彼ら全員を逮捕するには、現行犯でなくてはならない。

田辺と守口。そして千里のチャーリィチームはバックアップ。この慎重さと堅実さが、彼らが尻尾を掴ませない最大の理由だ。最後尾で千里はマンションに踏み込んだ。

「ブラボーよりチャーリィへ。セクシーダイナマイツがお出ました。人喰いアザラシは腹ペこのようだぜ」

ブラボーから二十秒遅れて目標の八階に到達する。階段を使ったが、突入部隊の誰もが少し呼吸を乱している程度だった。犯罪目的とはいえ、そのためにこれだけ鍛えていることは称賛に値した。

「アンタらが噂の駄目男連盟（バレンタインズ）かい。思ったより本格的じゃないか」

それは通路の中央に立ち塞がっていた。ハーフと思しき肌と髪の色。肉感的な曲線を描く美脚と美尻。そして何より目を引くのがその胸から突き出た、一般平均を凌駕する質量の双球だった。そしてその推定Xカップの爆乳を覆っているのは、特注と思われる紫のレースブラと、漆黒のスリップドレスだった。

千里は脳内の人名録を検索する。ザムザぐれ子。朝起きたら乳がアザラシになっていたと豪語する彼女こそが、今回の目標（ターゲット）だった。

「相変わらず鋭い勘だな、ミス・双海豹（ダブルシール）」

「あんたらがアタシを狙うなら今日しかない。そう思っていたよ」

江坂の片腕といわれている三国とぐれ子が睨み合い、対峙している。ぐれ子は右肩に釘バットを担ぎ、三

国も腰からナイフを抜いていた。

「それにしてもタイミングがよすぎるな。情報源は誰だ？」

「一つ教えてあげようか。アンタの隣にいる中崎クン。実はもう、未使用品（チェリーボーイ）じゃないってさ」

中崎が三国に飛びかかるのと、淀屋がその中崎の首を掴んで押し倒したのはほぼ同時だった。

「忍び込んだときに……捕まったんだ……。そしてあの女は……俺が大事に守っていたモノを……」

中崎は涙を流していた。田辺が小さく、バカヤロウと吐き捨てた。同業者の多くがこの女海豹の牙に掛かって半殺しになったり、拘置所送りになったり、女性不信に陥ったりしている。単独で彼女を相手にするのは、彼らの間ではタブーとなっていたし、百戦錬磨のバレンタインズのメンバーでさえ、今までに何度も手痛い打撃を被っていた。中崎も当然、そのことは熟知していた。

それでも、手を出さずにいられない。そんな魔力を秘めているのだ、あの乳は。

「お前一人に、何人もの仲間がやられた。バレンタインの今日こそは、仕返しをさせて貰う」

「ムカついてんのはあんたたちだけじゃないよクソツタレ。出てきな、みんな」

ぐれ子が指をぱちんと鳴らす。八階のドアが一斉に開いた。そして各々の部屋からわらわらと。

それは、女だった。バレンタインズの所業を含む性犯罪や軽犯罪の被害に遭い、怒りや哀しみをその内に溜め込んでいた女性たちだった。手に手にフライパンやゴルフクラブを握り、ゆらゆらと近付いてくる。

「こいつは……危険地帯（バイオハザード）だな」

「甘い家（スウィートホーム）だとでも思ったかい？」

「同じ会社なんぞな」

元ネタがわからなければ検索するか無視すればいいと千里は思った。

ゾンビの群れが六人を取り囲む。逃げ道は塞がれていた。

「やるしかないようだな。守口」

「おうよ」

守口がスウェットの前を開く。一瞬で開けるように改造してあった。スウェットの下は全裸だ。女性に囲まれ、すでに膨張状態にあったそれはゾンビたちに混じっていた三分の一の処女と男性嫌いを恐慌状態に陥れた。残りの三分の二は凝視したり目を塞いだ掌の隙間から観察していた。

淀屋がフライパンやゴルフクラブを回避しながら女性に取り付く。次の瞬間。胸元からスリとブラを抜き出した。三国も鮮やかなナイフ捌きで襲いかかる女たちの服を切り裂いていく。あちこちで甲高い悲鳴が上がった。千里も身を守るため仕方なく、女性たちの胸を揉みしだく。もちろん仕方なくですよ？

六人の猛攻に包囲網が破れはじめる。だが、多勢に無勢。田辺が捕まり、引きずり倒される。上から鈍器が雨の如くに振り下ろされる。守口も股間にヒールの爪先を埋められ、床の上で痙攣していた。中崎ははじめから、役に立たない。

ここまでか、と千里は思った。そのときだ。

「ブラボー、チャーリィ、無事か！」

エアガンを腰だめにした江坂が平林、九条と共に突撃してくる。戻りが遅いので、加勢に来たのだ。

女たちの壁が割れる。その奥に立ち塞がるのは、漆黒のスリップドレス。

不敵な笑みを浮かべて、ぐれ子が手招きした。

「かかってきな、マザーファッカーども。まとめて相手してやるよ」

江坂がエアガンを乱射する。その左右から平林と九条が襲いかかった。ぐれ子がステップを踏み、旋回する。ドレスの裾が翻り。

頭部を殴打された二人が腰から崩れ落ちる。エアガンの弾丸はすべて叩き落とされている。制止したぐ

れ子の、二つの胸だけが盛大に上下に揺れていた。

三国がナイフを繰り出す。ドレスの胸元を浅く切り裂いた。紫のブラが露わになる。その重量感に一瞬目を盗られた。

伸びた腕に肘が振り下ろされた。嫌な音が響いた。三国がうめき声を上げ、腕を抱えて床に倒れた。

目の前に夢にまで見た据え膳が揺れている。だが、残ったメンバーの誰一人として動けなかった。

「どうした？ アタシのを揉みたいんじゃないのかい？」

もう揉むだけでは許せなかった。その巨大なブラを取り去り、頭頂部を露わにしてやる。江坂の目がそう語っていた。

しかしこの化け物相手にいったいどうやって戦うのか。

勝算が、ひとつだけあった。千里にだけ、あった。

「江坂。私に任せていただけませんか」

「何か策があるのか？」

「少し」

「……わかった。任せよう」

黒革のオープンフィンガーグローブを詰め直す。そうして両手を半開きにし、体勢を低くした。手強いと見て取ったのか、ぐれ子も釘バットを構え直した。

そのまま睨み合う。お互い一步も動かない。

一分ほどが経過した。遠くから音が聞こえてきた。それはサイレン音だった。サイレン音はどんどんマンションに近付いてくるようだった。

ぐれ子と江坂がそれに気付いた。意識が逸れた。

その機を逃さず、千里はぐれ子にタックルを仕掛けた。美脚に取り付く。タックルを切ろうと膝を繰り出す。膝を避けて、千里は背後に回った。そのまま指を。突起に絡めて。

指の腹にレースの感触を感じた。指先に力を入れる。一瞬だけ、その柔らかな感触を楽しむ。

そのまま、ブラを上へと引き上げた。男たちの歓声と、彼女の可愛らしい悲鳴が共鳴した。

サイレンがマンションの真下で止まった。複数の靴音が階段を駆け上ってくる。江坂たちの突撃に合わせて、携帯から本部に連絡を送っていた。その応援が到着したのだ。

胸を隠して踞っているぐれ子を後ろに残して、逃走経路を探している江坂の前に立ち塞がった。

「公安の千里だ。江坂以下バレンタインズのメンバー。住居不法侵入、婦女暴行、その他諸々の現行犯容疑で逮捕する」

十一人のメンバーたちが次々とパトカーに詰め込まれた。代表者らしき警官が千里に敬礼を送る。見たことがない顔だった。千里は軽く会釈を返す。

千里の頬には手形が残っていた。ブラまで捲りあげたのは正直やりすぎた、と思った。だがあの場で、ああする以外に場を収める方法があっただろうか。あつたかもしれない。だがあの場では、千里にはそれしか思いつかなかったのだ。

しかし果たしてそうだろうか。あの世界に二つとない乳を揉んでみたい。触ってみたい。そういう想いがまったくなかったと言い切れるだろうか。むしろそういう想いを抱かない男がこの世に存在するだろうか。それは難しい問題だった。

それに。と、千里は思った。

善悪はどうあれ、彼らの個々の技術や心構え、持っていた自負はまさにプロフェッショナルのものだった。千里は彼らの言動に驚き、また共感した。そして、最終的には逮捕することになるだろうが、その前に本懐

は遂げさせてやりたい。そう思ったのだ。

女性たちには悪いことをした。しかし自分のとった行動を、千里は後悔していなかった。

千里の思考を断ち切るように、サイレン音が近付いてきた。

マンションの下にパトカーが三台つけられる。六人の警官が降りてきた。その中に千里の知った顔もあった。

「千里捜査官。バレンティンズのメンバーは？」

その一言で千里は悟った。やられた。ヤツらは、真の意味でプロフェッショナルだったのだ。

パトカーに偽装したセダンの中でスパイ大作戦のメインテーマが流れている。その音楽に合わせて、何度もハイタッチが繰り返されていた。運転しているのは森ノ宮で、機嫌よく紫煙を燻らせていた。

「失敗をリカバリするために大切なのは、最悪の事態を想定し、そのための最小限の手を事前に打っておくことだ」

静かに江坂に語りかけているのは、バレンティンズ最後の男。メンバー最大の知謀を持つ男。

「新人（ルーキー）を信用していなかったわけじゃない。ただ……そういう可能性もあるかもしれない、と考えていただけさ」

車は軽やかに道路を走ってゆく。景色が後ろに流れていく。画面の上と下が黒く塗りつぶされる。カメラが静かに引いていき、まっすぐな道路が大写しになる。スタッフロールはもうすぐだ。

「ところで蒲生」

江坂が真面目な顔で口を開いた。

「このシリーズ、いったいつまで続けるんだ？」

蒲生が窓から顔を出す。爽やかな風が通り抜けていく。画面はブラックアウト。蒲生の声だけが、客席に響く。

「そいつは色男（ブラッドピット）に聞いてくれ」

(完)

雛人形失踪事件

「内親王と右大臣はまだ見つからぬのか！」

何度目かになる皇子の叱責を受けて左大臣は額を敷布に擦り付けた。

「申しわけございません。五人囃子と三人仕丁を総動員して探し回っておるのですが……」

「祭りがはじまるまでもう一刻もない！ いったいどうするつもりだ！」

「日付が変わるまでには何とか！ お願いいたします！ もうしばらくの猶予を……」

厄介なことになった。頭を下げたまま左大臣は毒づいた。あの右大臣がやって来たときから、いやな予感はしていたのだ。

昨年、当時二歳だった次女が、雛壇にいたずらをして先代の右大臣を壊してしまった。それで今年は、右大臣が新たに買い足されて彼らと同じ雛壇に飾られることになったのだ。

新しい右大臣は、京都の老舗人形店でつくられたものだった。同じ雛人形でも、デパートのセールで買われた左大臣たちとはまったく違う。顔立ちは上品でたおやかだし、着物の生地は京友禅だ。内親王が田舎っぽい皇子よりも洗練された容姿の右大臣に惹かれるようになったのは、当然の成り行きだった。

だからといって雛祭りの前日に駆け落ちすることはないだろう、と左大臣は思った。人形にだって最低限の道義はある。よりもよってこの日に姿を消すなど、あまりにも道義にもとる仕儀ではないか。

ともかくも何とか皇子をなだめようと左大臣は頭を上げた。だが次の句は、駆け寄ってきた女官長によって遮られた。

「どうした女官長」

大上段から皇子が声をかける。女官長は視線を上げた。

「申し上げます。内親王様と右大臣様を発見いたしました」

皇子と左大臣は同時に驚いた。

「何と！ いったいどこで発見されたのじゃ！ して、お二人は無事なのか！」

「御二方様は、犬小屋の内にて発見されました。仕丁たちが見つけたときには、御二方様はすでに五体バラバラの状態です……」

左大臣は小さく呻いた。おそらく逃走の途中で番犬のショウイチに発見され、散々に噛み破られたのであろう。許されざる恋の哀れな末路だった。

「これでは祭りが執り行えぬ……。どうするのだ左大臣！」

「そう申されましても……」

聞きたいのは左大臣の方だった。このままでは何ともみっともない雛人形になってしまう。左大臣は文字通り頭を抱えた。

「左大臣様……」

隣で見ていた女官長が気遣わしげに声をかけたが、左大臣には何の気休めにもならなかった。

女官長はその姿を沈痛の面もちで眺めていた。しばらくそうしていたが、ついに何かを決心したように顔を上げ、口を開いた。

「皇子。わたくしに一つ、案がございます」

「ママー！」

三日の朝、長女の声に呼ばれて雛壇までやって来た母親は目を見開いた。

内親王が座っているべき場所には長女の平安バニーが、右大臣の場所には長男の超合金皇族戦隊ミコレ

ンジャーが、人形たちと並んで座していた。

(完)

スクリーンヒーロー

隙間から差し入れられたのは、七インチくらいの小さな液晶画面だった。

ヘルメットを被った、煤だらけの顔が淡い光の中に映る。がんばってください。もう少しですから。耳障りな轟音の中で微かに、上の方から声が聞こえる。声に合わせて、画面の中の口が動いた。

熱さで意識が遠くなる。身体中が汗で湿っているのに、口腔内は渴ききっている。水が、水が欲しい。

騒音は止まない。積み重なった瓦礫を取り除いているのだ。崩れないように。慎重に。大きいのは音ばかりで、背中に架かる重みは先ほどから変化がない。

画面の中の顔が替わった。さっきまでと同じ、煤だらけだ。けれども、今度はヘルメットを被っていない。

がんばって、ママ。

今度は声は聞こえない。どこか安全なところにいるのだろう。でも、口の動きでわかった。何度も繰り返してくれるから、わかった。

これでもう少しがんばれる。そう思った。

(完)

侵略！ タコ息子

中学入学のお祝いに、僕はタコ型の貯金箱を買ってもらった。

厳密には、タコとはちょっと違う。タコよりも頭がやけに大きくて、足がもっと細長い。多少デフォルメはされているのだろうが、それにしたってとてもじゃないがタコには見えない。入学祝いに貯金箱、しかもこんな不気味なモノをプレゼントするパパとママのセンスを疑う。

しかもこのタコもどき、ただ気持ちが悪いただけじゃない。喋るのだ。

「おい、金をくれ」

タコにいきなりそう話しかけられたときは、驚いた。

タコが言うには、今はこうして貯金箱になっているが、本当は遠い星からやって来た宇宙人なのだそうだ。どうせ嘘をつくならもっと上手い嘘をつけばいいと思うのだが、タコにはこれくらいが限度なのだろ

う。

せっかくなので、なぜ貯金箱になっているのか聞いてみた。

「金がいるからだ」

返答は、何の面白みもないものだった。何でもこの星へ来るのに乗ってきた宇宙船が故障して、その宇宙船を修理するのにお金が必要なのだそうだ。それで貯金箱に化けて、僕たち「愚かな人間ども」からお金を騙し取る計画なのだという。

そこまで聞いたところでタコの真っ赤な顔が青黒く変色してきたので、僕はタコの喉元から手を離した。

そもそもなぜ宇宙人が地球までやって来たのか。

「……貴様らの偵察隊が我が星に来たからだ」

タコはそう吐き捨てた。タコが言うには、僕たち人間がそのうち、彼らの星へ大挙して押し寄せることは間違いないのだそうだ。だからその前に攻め込んで、人間を滅ぼす。それが彼らの構想だった。

そこまで聞いた僕はようやく、彼らの言ってることが何だか本当であるような気がしてきた。

僕はまだ小学校を卒業したばかりだ。それでもこの世界に嘘が多いつてことには何となく気付いている。中学生になれば、今まで以上にまわりには嘘が増えることだろう。タコの言うことを信じちゃいけない。そう思った。

入学式が終わった今日、僕の住んでいる地球はまだ平和だ。タコたちが攻め込んできたという話も聞かない。

やっぱりあれは嘘だったんだ。僕はそう確信していた。

え？ あのタコはどうしたのかって？

使い終わった貯金箱は金槌で叩き割られる。それがお約束だ。

僕のは一度も使われなかったけれども、僕の性格は、貯金箱にお金を貯めていくということには向いていなかった。きっとそういうことだ。

もちろん、このことはパパとママには内緒だ。

(完)

三丁目の女

「三丁目の浮気くらい、大目に見ろよ」

「開き直るその態度が、許せないのよ」

二挺拳銃を華麗に操りながら彼女が俺を追ってくる。二丁目なら商売女だからまだ我慢できるが、三丁目ならそうではないから許せない、というのが彼女の理屈らしい。

「ここが地獄の三丁目よ」

銃弾から身をかわしながら、角の豆腐屋、その隅に貼ってある緑のプレートを見る。八丁目。違う。だがこの通りを進めば、丁番は一つずつ減っていくことになる。追い込まれている。そう思った。

反転する。彼女は驚きの表情を浮かべたが、それも一瞬。丁度よいとばかりに突撃してくる。

俺は物陰を利用しながら、距離を詰める。丁々発止のやり取り。だが、俺の方が一枚上手だった。

躍り出たと見せかけた俺の服に、何発もの銃弾が埋め込まれる。その隙に、パンツ一丁の俺は彼女の脇をすり抜け、逆の丁目へと走り抜けた。

やれやれ、何とか切り抜けた。あとは彼女の怒りが収まるまで、どこかに隠れているしかない。長丁場になりそうだが、まあ、どうにかなるだろう。

そう考えていた矢先に、一発の銃声。

俺の眉間を撃ち抜いたのは、通りの先にいた、浮気相手の女だった。

「両手をついて謝ったって、許してあげない」

(完)

ベンチャー企業

オフィスに入ると、ベンチが並んでいた。

赤、青、緑、茶色、灰色。変わったものでは紫。色とりどりのベンチが、細長い室内に、壁にくっつけられて二列、奥へと伸びている。

新しい形態の会社だとは、事前に聞いていた。だが俺は、どうせまたIT関連の振興企業か、いわゆる隙間産業的な会社であろうと高をくくっていた。なぜなら俺の周りに溢れているのは、そんな現実ばかりだったから。

だがこの会社は、どうやら本当に変わっているようだ。

それぞれのベンチには多種多様な人間が貼り付いていた。あるベンチでは労働党議員がポンドの切り下げに関する自説を展開しているし、またあるベンチでは三番打者がマウンドと監督の顔を交互に見比べ、細かな指示を受けていた。

「こちらへ」

案内役が先へと促す。戸惑いながらも俺は、ベンチに寝そべり、七十五キロのバーベルを上げている女性の横を抜けて、さらに奥へと歩みを進める。

誰もいないベンチの一角で、案内役が足を止めた。

「ここがあなたの持ち場です」

それだけを言い残し、案内役は足早に去っていく。どうしたものかと辺りを見回していると、ベンチ一つでコミカルなアクションを繰り広げていたアクションスターと交代で、覆面をかぶった巨漢の男が近付いてきた。

覆面とタイツ、リングブーツだけを身に着けた巨漢が、俺の前で立ち止まる。

男が俺に笑みを向けた。挑発的な笑い方。そいつで理解した。

ああ、なるほど。そういうことか。

俺はスーツの上着を脱ぎ捨てた。ネクタイを緩め、こいつも後ろへ放り投げる。

「カモン、ファッキンジャップ」

男が手招きする。それで覚悟を決めた。

巨漢レスラーの頭部を殴打するため、俺はベンチを持ち上げた。

(完)

カリブ海はメキシコ湾の南側、カリブ諸島に囲まれた大西洋に隣接する水域である。

古来より海賊の頻発、氾濫する海であることは有名である。それはこの海域が無人島を含む大小さまざまな島々によって構成され、それらの島は隣接するベネズエラ、パナマ、コロンビア、コスタリカといった十を越える国の管轄が入り組み、統一された組織による犯罪者の捕獲・駆逐が困難であることが大きな理由として上げられる。またそのため犯罪者が逃げ込むのに好都合な立地条件でもあった。

その状況は現在でも変わってはおらず、平成のこの世にもカリブ海は未だ海賊天国であり、カリブ海域で輸送船が拿捕されたり、観光客が捕らえられて身代金を要求されたりといった事件が新聞やニュースを賑わせることがある。変わったのはその昔彼らが手にしていたのがシミタールやカッタラスであったのが、今ではウージやカラシニコフである点であろう。

だから覚悟はしておくべきだったのだ。こういうこともあるのではないかと。

人一人いない島の頂きで、澄みきった青緑の空に向かって、叫んだ。

「巨乳なんて、キライだ—————！」

ザムザぐれ子はカリブ海域では有名な海賊だった。朝起きたら乳がアザラシになっていたと豪語するほどの巨乳の持ち主で、界限では『カリブのパイオツ』、または『パイオーツオブカリビアン』の二つ名で知られている。性格は粗暴かつ残虐で、その昔彼女の胸をただ脂肪の塊呼ばわりした暗殺拳伝承者は、今まで自らが手をかけた者たちと同じような状態で最期を遂げた。

そのぐれ子に俺が目をつけられてしまったのは、俺が巨乳に目がなく、眼前に頂を誇張する山々があればそれを揉みしだかずにはいられない性格だったからだ。だから、俺の乗っていた舟が拿捕され、ぐれ子の前で一列に並ばされ、世に二つとないそれが目の前を通った瞬間つい手を伸ばしてしまったとしてもこれはもう仕方がないことだろう。何と言っても彼女はデニムのホットパンツの上に黒いタンクトップ一枚、もちろんノーブラだったのだから。

彼女が凍り付いた表情で機関銃を取り上げるのを見て、俺は腕を押さえていたジョニーデップ激似の海賊を振り切り、海に飛び込み、泳ぎ、この無人島へ、逃げ着いたんだ。

まさか追ってくるなんて、思ってもいなかったんだ。

「ケツにキスしな、ファッキンジャップ」

お上品に翻訳してほしいそういった意味合いのスラングを叫びながら、機関銃を乱射する。俺は岩や椰子の木を盾にしながら、這々の体で逃げ回る。

「何でそんなに怒るんだ。君の持ち物が素晴らしいから、その、ちょっと手が伸びてしまっただけじゃないか！」

「黙れ変態大国ファッキンジャップ。その手の指を全部切り取ってミキサーに突っ込んでやる」

「照れることはない。世界に誇れるそれを、君は胸を張って見せつけるべきだ」

「お前らセクハラ男は知らないだろうが、Dカップ以上の女性の三分の二が自身の胸にコンプレックスを抱いている。そちらの職業に就いたものなら利用のしようもあるが、それ以外では必要以上に大きいことは無用の長物。そう思っているのを知らないのかこの腐れマラ」

確かにむやみやたらに触られたり視線が集中したりすることは気分のいいことじゃないかもしれないなあ、と自らの行いを棚に上げて思う。

しかしながら、これくらいのお触りで命まで狙われることはないじゃないか、と思うのは男の勝手な判

断だろうか。そうかもしれない。

「だが、壁おんなと山おんななら山おんなを選ぶのが男というもので、そう考えれば大きい方が得というものじゃないか」

「そういうバカ男が多いからムカツくんだ。結局小さくても大きすぎても女にとってはコンプレックスになるんだ。貴様らバカ男のせいだな！」

話が八つ当たりっぽくなってきた。八つ当たりで殺されてはたまらない。

銃弾の雨を避け、雑草を掻き分けながら上へ上へと走る。途中ペンギンの群れとすれ違った。種類はわからなかったが、何であれカリブ海にはペンギンはいなかったはずだ。奇妙に思ったが今はそれどころではない。7.62ミリ弾が絶え間なく降り注いでくる。何頭かのペンギンが流れ弾を食って四散する。立ち止まれば、俺もああなる。ファッキンジャップくらいわかるよバカヤロウ。

このまま逃げては追いつめられる。島の裏側に逃げなければ。

逃走コースを横に変えた。そのときだ。

ぼろり。

と、足下の地面がこぼれ落ちた。

いつもそうだ。ポロリもあるよ。その一言に、騙されるんだ。

そう思いながら、落下した。

落下した先は柔らかかった。

「何だい。人の胸の上に落ちてくるなんて、失礼な男だね」

女の声に慌てて立ち上がると、そこにはこれまた豊かな胸部を持つ女性が、いた。

「あたしはアンジェリーナ。トレジャーハンターだ」

トゥームレイダーの評価すべきところはそのゲーム内容ではなく、ホットパンツ姿の巨乳美女というトレジャーハンターのイメージを定着させたところだと思う。個人的に思う。

「ここは確か無人島だと思ったんだが……あんたここの住民かい？」

「そうだ。そしてこの島では互いの胸に触れ合うのが挨拶となっている」

上から文字通り銃弾が降ってきた。

「もう新しい女に手を出したのかい、セクハラジャップ」

これから出すところだ、と答えたかったが油を注ぐだけなのでやめておいた。

「何だいあの女は」

「凶暴な海賊だ。早くここから逃げるんだ」

「そうはいかない。この島にペンギンがいる秘密を見つけださなければ」

それに、と言いながら引き締まった腰から得物を引き抜いた。こちらは二丁拳銃だ。

「あたしは自分より胸の大きな女は嫌いなんだ」

たちまち銃撃戦が始まった。俺にできるのは、もちろん逃げることだけだ。

落ちたところは天然の洞窟だと思っていた。だが、奥へ進めば進むほど。周囲の岩壁は明らかに機械的に切り出された形状に変わり、奇怪な文様が散見されるようになった。

なるほど。アンジェリーナはこの遺跡を調査していたのだ。

岩壁が狭まってくる。このままいけば行き止まりになるかもしれない。しかし、引き返せば待っているのは死だ。進むしかない。

三分ほど走った。両壁は身体の幅くらいまで狭くなっていた。ここまでか。そう思ったとき。

道が開けた。

広場だった。床から壁面、そして七メートルほどの高さの天井までもが、水晶と思われる鉱物に包まれ、

天井の隙間から射す陽光を受けて輝いている。

そしてその中央に、盛り上がった高台があった。

吸い寄せられるがごとく高台に近づく。水晶を削りだしたような、大きなレバーのようなものがそこにはあった。

「見つけたぜ、エロジャップ」

後ろから声がした。振り向くと、そこにいたのは予想どおりぐれ子だった。アンジェリーナも一緒にいる。

「彼女から話は聞いたわ。確かにあなたは女の敵だ」

三つの銃口が俺に向けられた。どうやら意気投合してしまったらしい。この遺跡は、俺にとっては絶体絶命都市であったようだ。

「しつこいオトコは嫌われる。いい加減くたばりな」

ままよ。俺は高台にすがりついた。そしてレバーを、動かした。

お約束のように轟音が響く。そして島全体が激しく揺れはじめた。

「何だ、これは」

「乳が……反応している……」

島がその身体を揺さぶる。大地を揺さぶる。ぐれ子とアンジェリーナの胸も揺れる。

そして島の表皮が。剥がれ落ちるように。草と土と岩の下から。純白の氷壁が迫り出し、貫き、翼を広げ。

「これはいったい……」

地球の気候は周期で変化するといわれる。今熱帯である場所が、千年後にも熱帯であるとは限らない。

そのようなときに、もしも気候を自在に調整できる機構があれば。そのようなことを、古代の人間も考えたのかもしれない。

その昔。ある地方でロケットの打ち上げがあった。火星へ第一期の住民を送る、テラフォーミングの一環である巨大船団ロケットだった。

打ち上げられたのは冬だった。多くの人々に見送られ、打ち上げられたロケットは、その際に放射した熱で、一帯に一時的な夏をもたらした。それはロケットの夏、と呼ばれた。

土壁とともに海に落ちたペンギンたちが気持ちよさそうに回遊する。ぐれ子とアンジェリーナも青白い光に包まれ、海へと運ばれていった。アザラシのような胸は、本当のアザラシへと変わってしまったのかもしれない。

突如発生した氷の島は、カリブに初めての冬をもたらした。

俺は一人、島の頂上に立っていた。そこは今、まさに世界の中心であるように思えた。

助けが来る可能性は、なかった。俺は叫んだ。

(完)

しんねんど

新しい粘土を力いっぱい捏ねる。

今年はどうな形にしようかと、まとまらない思案は指先に伝わり、土の塊を不恰好なものにする。慌てて形を整え、それからどうしようかと悩み、気付けば手の中にはわけのわからないものができている。

この時期は、大事な時期だ。この時期だけが、新たな自分をつくり直せる。気に入らなかった自分をリセットし、まっさらな自分ではじめられる。

今年こそは一番の自分を。そう思って粘土を捏ねるが、いつだってそれは、思い通りにはならない。思い通りにつくれたとして、それすらあとから気に食わなくなることもある。

普段どおりでいいじゃないかと思う。だけど心のままにつくったものは、いつだって恥ずかしいほど不恰好だ。

だから少しでもよくなるように。少しはましに見えるように。

必死で必死で、指を動かす。

乾いた粘土はそのうちひび割れ、その場にぼろぼろ崩れ始める。

新たな粘土が用意される。指は休むことなく、土を捏ねている。

(完)

ちちのひ

ちちのひだったのでちちにちちをプレゼントしました。

いぜんからほしいほしいといっていたちちはそのおくりものにおおよろこびで、せっかくだからタマもとってしまおうかしらとごまんえつです。ただしそのあとの「もしかするとおとなになったぐれ子ちゃんよりもおおきいかもね」というひとはちょうしにのりすぎだとおもったので、マウントでさんじゅっぱつくらいなぐっておきました。さおだけやがつぶれないのはけりあげられようがにぎられようがつぶれるそのものじたいがないからなのです。

プレゼントのおかえしね、と、ちちはわたしをやまへとつれていってくれました。なぜやまなのか。そこにやまがあるからでもあるのですが、やはりきょうがちちのひであるからなのでした。

ちちによると、このよにはふたつのちがあるそうです。わたしちせいめいのははとなるだいちと、それをゆうこうかつようするじんるいのえいち。これらふたつがもりあがりを受けいしてこそ、それはりっぱなたにまをもつ『ちち』となりうるのだそうです。かたほうどちらがおおきすぎても、またちいさすぎてもゆたかなデコルテをいじすることはかなわない。おっきいほうがいいのはまちがないですが、なによりだいじなのはトータルバランスなのだそうです。わたしも、ただおっきいだけでは、あんさつけんてんしょうしゃに「ただのしぼうのかたまり」よばわりされてもしかたがないとおもいます。

いま、このちちきゅうはこのバランスがおおきくくずれてしまい、まほうやてんしのちからをもったほせいようぐをもちいてもどうにもできないじょうたいになりつつあるそうです。そのことをぐれ子ちゃんにもしてほしいの。そうってちちはさみしそうにわらいました。

うにゆうやまではペンギンがだいはいせいでいました。うみでくらせなくなったペンギンたちのなかからしだいにりくじょうにてきおうできるものがあらわれ、うみでくらすものたちよりもそれらがいきのこって、すこしずつすこしずつ、かれらはやまへとせいかつけんをいどうしてきたのです。いまではそらをかっくうできるしゅや、くびがながくのびてたかいところのさかなをとれるしゅや、つばさからしょうげきはだせるしゅ、うでどけいがたりモコンできょだいなロボットをあやつるしゅもふえてきたそうです。

さにゆうやまではアザラシがふえているの。となりのやまをゆびさして、ちちがいました。そのうちペンギンとアザラシのなわばりがぶつかりあって、おおきなあらそいがおきるでしょう。そして、かれらはそのうちきづくはずです。おたがいよりももっとくみしやすく、じぶんたちをそのようなじょうきょうにおいやったげんきょうをこうげきすることに。

そのうちわたしたちもかれらにのっとられるかもしれない。ちちのそのことばが、わたしにはよげんのようにきこえました。

ちちのちちが、きゅう、とないたようなきがしました。

(完)

雨が降るかせめて曇りになってくれと願っていたその日の天気は、生憎の晴天だった。

どうしよう。今朝から、その言葉がずっと俺の頭の中で十六倍速回転している。

悪いのは浮気をした俺の方。それはわかっている。でもこの状況じゃ仕方がないじゃないか。そう思ってしまう俺がいるのも事実だ。

三ヶ月ほど前。同じわし座のアルシャインちゃんとコンパで出会った。解散後、意気投合した俺たちはそのまま白鳥座にあるラブホテルへ入った。

別に恋愛感情があったわけじゃない。お互いに快樂を交換し合っただけだ。関係したのも、その日一日だけ。その後はまったく連絡を取り合っていない。

それなのに。織姫がどうしてそのことを知ったのか。しかも、こんな最悪のタイミングで。

「明日、殺す」

昨日織姫から届いたメールには、それだけが記されていた。だがその一言には、彼女の怒りが十二分に込められているように感じた。

逢いに行くのをやめようかとも思った。だが、今日彼女と逢うことをやめれば、その瞬間から俺は彦星ではなくなってしまう。それに、浮気をしたのは事実だが、織姫への愛が薄れたわけではなかった。

そもそも一年に一回しか逢えないという今の状況が問題なのだ。織姫に逢えないという寂しさが、俺を浮気に走らせたのだ。逢いたいときに彼女に逢える状況があったなら、俺は浮気なんてしなかった。アルシャインちゃんの巨乳は確かに魅力的だったが、それでも浮気はしなかった。と、思う。

いい機会だ。もっと逢える時間をつくれるように織姫と話し合おう。浮気の話は悪かったと、先手を打って謝ってしまえばいい。それから、あとは有意義な語らいを交わすのだ。そうだ。そうしよう。

俺は頬を平手で叩いて気合いを入れた。恒星からの光を反射して、目映く輝く天の川。そこに今日一日だけ架けられた、絢爛豪華な瑠璃の橋へ一歩を踏み出す。

橋の向こう側に、人影が見えた。今日というこの日にあの場所にいるのは、ただ一人のはずだった。

「織姫」

俺は満面の笑顔を浮かべ、小走りで織姫のもとへ向かった。そして彼女の顔がわかるくらいまで近づいたとき、俺は己の考えの甘さを知った。

織姫が長大なナギナタを振りかざして、俺に飛びかかってきた。

「ママ、見てー」

「まあ。七夕に流れ星だなんて、何だかロマンチックね」

(完)

こわい話

新しい部屋を借りたら幽霊が出た。

白い着物を着た女の幽霊だ。いい機会なので、前から疑問に思っていたことを聞いてみた。

「何でお前たちはみんな揃って貧乳なんだ」

「さいてー！ あんたさいてー！」

細い腕で起伏の乏しい胸元を隠しながら、幽霊はドン引いていた。

だが大事なことじゃないかと俺は思う。だって、巨乳の幽霊だったら、出てもまあ、ちょっとくらいは許してやろうかなとかむしろ出てくれたら嬉しいような何ともいえない気持ちにだってなるが、昔の絵でよく見るような貧相な幽霊では到底そんな気は起こらない。

「仕方ないじゃない。あたしらの頃は今のあんたらみたいに、好きなだけ食べられるってわけにはいかなかったんだから。その日その日を生き延びるのに精一杯だったの。貧相でも、仕方がないじゃない」

あたしだって毎日ちゃんとごはんを食べれていればもっとこう、とかぶつぶつ言っているのを無視して、何でこの部屋にいるのか問い詰めた。

「この場所に昔、あたしたちが住んでた長屋があったのよね。で、あたしの部屋があったのがちょうどこの辺りみたい」

「ということは、何か恨みを残して死んだのか」

「まあ生きてる間は恨み言ばかりだったから、そうなのかも」

つまりは自縛霊というやつなのだろう。俺としては貧相な幽霊に居座られても迷惑なので、早々に消えてほしい。

「心当たりはあるのか」

「そうねえ。いっぱいあるけど、どれだろう」

おっぱいあればよかったのに。

「塩って、効くのかな」

「ちょ、ちょっと待った！ えっと、そう、あれだ。一番激おこだったのは、父ちゃんがあたしを女郎屋に売り飛ばそうとして、その値段が相場の半額くらいだったのよね。何それふざけんとか思ったんだけど、父ちゃん「そんなにもらえると思ってなかった。それだけあれば充分だ」とか言い出して、うん、あれはマジムカついた。ちょっとマウントで二十発くらい殴らないと成仏できないわー」

「その父親というのはこれのことか」

俺が押入れの戸を開けると、その隅に縮こまって隠れている中年男の幽霊がいた。

女は無言で中年男を引きずり出すと、蹴倒し、マウントを取ってから、何ともいえない笑顔で拳を振り落とし続けた。三十発くらい。

「あー、すっきりしたー」

「いや、成仏しろよ」

女は晴れ晴れとした顔で畳の上に座り、茶を啜る振りをしている。幽霊なので当然湯飲みは持てないし、茶も飲めない。二人ぶんの茶を飲んでいるのは俺である。

「うーん。これじゃなかったみたいねー」

「他に思い浮かぶことはないのか」

「そうねー。うん。お腹いっぱい食べてみたい。満足するまで」

死因は餓死なのだそうだった。当時は珍しくなかったらしい。

「けれどお前、食えんだろう」

「仏壇的なところにお供えしてもらえれば食べられるよー」

ということなので、引越し用のダンボールで仏壇的な何かをつくって、そこにカレーを供えてみた。

「何これ！　こんなの食べたことない！」

「だろうな。作り過ぎたからちょうどよかった。満足するまで食え」

五皿も食いやがった。

「あー。満足、満足」

「なら、どうして成仏しない」

自分の分のおかわりがなくなって不機嫌な俺は睨みつけた。

「うーん。もう何日かこれが続いたら、満足するかもー」

俺は溜め息をつくど、仕方なく数日の居候を了承してやった。

一週間ほどを、俺はその女の幽霊と過ごした。

痩せ細って今にも死にそうだった、というか現に死んでいるのだが、ともかくその彼女は見る見るうちに血色がよくなり、あちこちに肉がつきはじめた。遠目で、しかも身体が透けていなければ、もう幽霊だとはわからないほどだ。毎日二人ぶんは食っているのだから、当然だ。

「それでどうだ。成仏できそうか」

「うーん。もう結構満足しているはずなのに、成仏できないんだ。なんでだろう」

俺に聞かれても困る。着物から覗く胸元を見る。

「それで、食ったら大きくなったのか」

「そ、そんなすぐに大きくなるわけないでしょ！　これから育つのよ！」

世の中には諦めが肝心だということもあることを、俺は知っている。

「ふん。そうよ。どうせあたしは、半額の女よ。わかってるわよ、あたしに魅力がないことくらい！」

泣きそうな顔で、上目遣いで、俺を見つめた。

「あんたとだったら……いいと思ったのに……」

俺は仏壇に己を捧げると、彼女に飛び掛った。

「責任取ってよね」

上気した肌で着物を直す彼女の身体が白く輝いている。成仏するのだ。

「女としての自信を傷つけられたのが、あたしの一番の心残りだったのね……。あなたのおかげで、やっとわかった。これで、成仏できる」

ありがとう、という言葉を残して、彼女は去った。そして俺はBカップ以下に反応したという黒歴史を脳内から消し去った。

一ヶ月後、部屋に帰ると彼女が待っていた。

「できちゃった。てへぺろ☆」

この夏一番のこわい話。

(完)

切り裂きジャッキ

今度こそ追いつめた、と思った。

日の当たらない、狭い袋小路である。高い壁を背にして、ヤツは立っている。逃げ場はない。

周囲には何も無い。これも重要だった。ヤツを追い込むことを見越して綺麗に掃除しておいたのだ。

小道具を用いたヤツのアクションには定評がある。道々に転がる棒きれや樽、店先の鍋や果物、テーブルなど、そこに何かがあればヤツはそれを利用し、飛び、跨ぎ、武器にして見事に逃げ去ってしまう。それは芸術的であるとさえ言えた。顔だけでいえばユン・ピョウの方が人気が出たろう。だがヤツは肉体で魅せたのだ。

個人的に惹きつけられるものがあるのは否定しない。だがヤツは犯罪者なのだ。何としてでも捕らえねばならない。それに私はサモ・ハン・キンポー派だった。燃えよデブゴン。

号令を掛ける。捕り手たちが一斉に飛びかかる。ヤツは手にした青龍刀で応戦するが、多勢に無勢だ。最早逃げる術はない。

そう、思っていた。

ヤツの身体が宙を舞った。人としてあり得ない跳躍力だった。隣の家屋根へ音もなく着地した。

「ワイヤーアクションは、使わないはずじゃなかったのか！」

私は叫んだ。心からの叫びだった。

それだけは。それだけは、して欲しくなかった。他の誰が使おうとも。ヤツにだけは、使って欲しくなかった。

信じていたのだ。ヤツの芸術的なまでのアクションがいつまでも見られる、と。私は勝手に、信じていたのだ。

寄る年波には勝てなくてね。そう答えるとヤツは、高笑いを残して屋根の向こうへ消えていった。

(完)

時計のハリー

俺は時計のハリーだぜ。

ハリーアップとアイツが叫ぶぜ。そうすりゃ俺は上昇するぜ。螺旋を描いてぶっトブぜ。

だけどときには下降もするぜ。ラインめがけて急降下だぜ。

一秒たりとも止まることなく、いつでも俺は全力疾走。

今となっては若くはないぜ。けど、今しか出せないリズムもあるぜ。

だから俺は今日も叫ぶぜ。十六歳（シックスティーン）のビートを刻むぜ。

だけどアイツは見向きもしねえ。俺もとうとうお払い箱さ。

朝日の当たるステージ上から、片手を上げておさらばするぜ。

かけてくれよな感謝の台詞を。背中越しでもいいからよ。

あばよ相棒、だけれども。たまには思い出してくれよな。

俺は時計のハリーだぜ。壊れた時計のハリーだぜ。

(完)

小高い丘に挟まれた場所に、そのビルはあった。

四階建ての小さなビルで、二つの店と、一つの事務所が入っている。

一階は、八百屋を兼ねた雑貨店になっている。二つの丘は日があたり、明るく、自然に恵まれた土地だったが、それらに挟まれた土地は薄暗く、いつも強い風が吹いている。当然人々の生活も、育つ作物も、他の場所とは違っていた。

一階の雑貨屋では、谷で採られた作物や、谷の人々がつくった民芸品が売られている。数は少ないが、他では見られないそれらの物品を売ること、そこそこ繁盛していた。

二階には、映像制作会社が入っている。タニマックスというシリーズで、女性の胸元ばかりを狙った短い映像をつくるのを、おもな生業にしていた。それらは野球中継が早く終わったときや、放映シーズンの谷間に穴埋め的に使われている。大きく儲かるわけではないが、それでもこの制作会社は潰れることなく、細々とこのビルの中で生き残っていた。

三階には「風の谷」という名の夜のお店が入っている。色んな意味で谷間を活用した商売だった。

そのビルに、新たなテナントが入ることになった。「平野興業」という建設事務所だ。

何でも、農地開発事業により右の丘が潰され、平らな農地につくり変えられるのだという。平野興業は、その工事のために谷に事務所を構えたのだ。

いち早くそのことを知ったビルの店子たちは、驚き、それから谷に住む者たちに、その事実を知らせて回った。

多くのものが驚き、頭を抱えた。

谷間の土地は、豊かではない。だが、豊かではないなりに、その土地を活かした生業が成り立っていた。彼らは、そこが谷であることを利用して、今日まで生きてきたのだ。

丘がなくなってしまうと、そこはもう、谷ではなくなる。そこに住む者たちは、今までとは違う生き方を見つけなければならなかった。

反対運動が持ち上がった。

住民たちが右の丘を取り囲み、非難の声を上げる。外からやってきた政府関係者や不動産関係者が追い払われた。

ビルにも多くの住民が詰めかけた。連日抗議を行い、平野興業を追い出しにかかる。

真っ先に根を上げたのは制作会社だった。三日目には耐えきれず事務所を引き払い、左の丘へと移った。一階の雑貨屋と三階の風俗店も大きな打撃を受けている。だが地元密着型の店でもあるため、容易に引越すこともできなかった。

住民たちの声は留まらない。耐えきれず、三階の店が逃げ出した。数日後、一階の雑貨屋も店を閉めた。ビルには平野興業だけが残った。

これまで平穏に、静かに暮らしていた谷の住民は、運動というものを知らなかった。一度点いた火を、消すすべを知らなかった。運動は加速し、人々の営みは置き去られる。

運動のために谷で生きられなくなった者たちが、ひとり、またひとりと去っていった。谷の人口は、もとの半分まで減っていた。

閑散とした谷間を、強い風が吹きすぎていく。

そんな様子を眺めながら、平野興業の社長は電話していた。

「ええ。我々のような小さな会社はね。こういうやり方しか、できませんから。大手の方々がやられること

の間をね。上手く使うようなね。さしずめ、谷間産業とでも申しますか」

(完)

二枚舌

二枚舌で有名な彼女はまたあちこちで僕に言うのとは違うことを言っているみたいだった。

舌だからということでもないのだろうけれども、食べ物に対する感想も、ころころと変わる。前につくったら美味しいと言って食べていたお好み焼きも、昨日は美味しくないといって半分残した。材料もソースも変えていないのに。

今日も、以前お気に入りだといっていた店に食事に来たのに、サラダをかき混ぜながら「イマイチね」なんて呟いている。

「味覚が変わったんじゃない？」

聞いてみたら、彼女は首を傾げた。

「そうかもしれない。また一枚、増えちゃったみたいなの」

そう言うと彼女は、僕に向かって大きく口を開けてみせた。

(完)

伝染タイツ

俺の周りでタイツが流行っている。

気付いたのは先日のことだった。確かに近頃急に寒くなって来たから、やたらとレギンスというか、そういうのを履いた女が増えてきたなあ、とは思っていた。そう思えたのは、俺が常に女の脚に注目しているからだ。

だからこそ、生足の女がいなくなったことにも俺は気付いた。街行くOLや社会人はもとより、ファッションは根性、生足は正義と信じている女子高生連中までがその脚を薄いナイロン地に包んでいる。真冬というわけでもないのにだ。

そういえば、と俺は思い出した。今年の冬はタイツがアツい、とかいうような記事を何かで目にしたことがあった。これはつまり、それが原因なのか。

人通りの多い駅前を歩きながら改めて観察してみると、そこはやはりナイロン地を下半身に纏った女性が至るところを闊歩していた。それも、普通のものだけではない。あるものは、その太股の部分に蝶のマークが浮かび上がっているし、あるものは全体にハートが散らしてある。色も肌色や黒、灰色といったものだけではなく、赤や黄や緑、金色や虹色なんてのもある。

もっとすごいのを見つけた。タイツの両側面に「安心と信頼の馬車馬堂」と文句が入れられている。あれは宣伝タイツだ。コード状のものをぐるぐると巻きつけたような、これはもうタイツじゃないだろうと思うようなものもあり、そこには雀が三羽とまっていた。あれは電線タイツだ。

それだけではなかった。空が、見る見るうちにサテンの肌合いに染まっていく。タイツを身に付けた脚々がトレンカ体制でレギンスを組み、俺に向かって攻め寄せて来る。

俺は走って自宅を目指した。

扉を開け、部屋に駆け込む。爪切りを取り出し、やすりで爪を磨く。

部屋の中も、つるりとした生地に覆われていく。それを無視して、俺は再び街へ飛び出した。

「でんせーん！」

叫びをあげて、一列に並んだ太股にむしゃぶりつく。そうしてから思いっきり爪を立てた。

「でんせーん！」

次の脚に飛びつく。同じように引っ掻いた。

次の脚へ。次の脚へ。俺を包み込む何かを破るために、俺はその行為を続ける。町にはただ、俺の叫び声だけが響いていた。

(完)

ペンギン High Yeah!

波打ちよせる砂浜に、一羽のペンギンが佇んでいた。

ペンギンは海を見ていた。波はうねり、高く低く形を変えながら留まることなく、打ちよせ、引いていく。それを見ながら考えていた。

どれほど歩き続けねばならないのか。男と呼ばれるために、どれほど孤独に耐えねばならないのか。どうして、争いはなくなるのか。

答えはいつでも決まっている。風の中を、ただ舞っているだけ。それだけだ。

羽馴染みのペンギンであるアデリーが、浜の上をよちよちと歩いて隣までやってきた。後ろに、孵ったばかりの子どもたちを連れている。

「また女房に追い出されたのか、フンボルト」

フンボルトと呼ばれたペンギンは、くちばしをしかめた。

「ちょっと喧嘩しただけだ」

「マウント取られて三十発殴られんのが喧嘩っていえるのならな」

「時間切れでドローだ。あれは」

答えは風の中を探すまでもなく、腫れあがった顔面が示していた。

「今度は何やったんだ」

膨らんだ顔がアデリーの方を向いた。

「……三回目の浮気くらい、大目に見てくれていいよな？」

「両鰭について謝ったって、許してもらえんだろうな」

よく三十発で済んだものだと思った。

「で、何だよ、こんなところまで」

アデリーが頷いた。

「ところでこいつを見てくれ。こいつをどう思う」

後ろに並んでいる子どもたちのうち、最後尾の一羽を鰭でペシペシ叩いて、前まで連れてきた。

「こいつは」

目を見張る。何の変哲もない、灰色の産毛に包まれた子ペンギンである。だが、一か所だけが、他の子どもたちと明らかに違っていた。

ペンギンたちの特徴である、二つの大きな鰭。その鰭があるべき部分に羽毛に包まれた細い腕が突き出て、その先は、五本に枝分かれしていた。

「こいつは……神の手だ。ゴッドハンドだ」

「知っているのかフンボルト」

フンボルトが重々しく頷く。

「神話は覚えているか、アデリー」

「いや。うちの両親は、そういうのが苦手だな」

「そうだったな」

フンボルトは話し始めた。

その昔、世界はニンゲンという名の神々が支配していた。ニンゲンは火を操る力、海の上を走る力、空を飛ぶ力、お肌に潤いを与えて十歳若く見せる力、寄せて上げることでないものをあるように見せる力、その他様々な超常の力を持ち、他の生き物たちの上に君臨していた。

だが、長き神々たちの支配にも、終焉が訪れた。あるとき、メス神の胸から、奇妙なものが生えたのだ。それは、白と藍色に彩られていた。黄色いくちばしを持ち、発達した一对の鰭を持っていた。そう。メス神の胸から生えたのは、ペンギンだったのだ。

世をはかなんだメス神はしばらくして、失意のうちに命を落とした。だが、胸から生えた二羽のペンギンは、宿主が死んだあとも生き続け、ついに神の肉体を完全に吸収し、己のものとしたのだ。

神の力を手に入れた二羽は、神の住まいし地で暴れ始めた。強靱な鰭で神殿を打ち壊し、田園を蹂躪し、東京タワーを倒壊させ、原発でエネルギーを充填した。

神々は天の雷や炎の槍を持ち出し、ペンギンを攻撃した。だが、神の力を宿した羽毛はすべての攻撃を吸収し、それにより習得した放射能火炎でもって神の軍勢をなぎ払った。

神々は滅びた。そして、ペンギンだけが残った。

そうして今。地上と海中は、アデリーやフンボルトたちペンギンの天下となっている。ただ空だけは、彼らの同胞のために残されている。飛べないことだけが、彼らペンギンの唯一の欠点だった。

「つまりこの手は、その昔の神々が持っていたものだということか」

「そうだ」

二羽が末っ子を見つめる。何やらわからず、末っ子は首をかしげている。

「だが鰭がなくては、泳げないだろう」

「その代わりに、他のことができるかもしれない。この子はそういう子になる。そんな気がする」

話題になっている当の本人は、退屈そうな表情で、その手でぼりぼりと胸を搔いていた。

変化はすぐに訪れた。

「シュレーターが」

フンボルトのもとにアデリーがやってきた。シュレーターは、例の末っ子に付けられた名だ。

「何があった」

「いいから、来てくれ」

アデリーが波間に消える。フンボルトもあとを追い、飛び込んだ。

まだ生きていいのか、とフンボルトは思った。

シュレーターは泳げない。いや、泳ぐことはできるが、他の子どもらと同じように早く泳いだり、器用に旋回することができない。それは、彼らの感覚からすれば泳げないに等しいことだった。

普通の鰭を持った子でも、ごくまれに上手く泳ぐことができないものがある。そういうものは長じるにつれ餌を与えられなくなり、また自身でも獲物を捕ることができず、飢え、死滅してゆく。それが摂理だった。

シュレーターもおそらくそうなるだろう、とフンボルトは予想していた。

「何だあれは」

鰓で指し示してフンボルトが言う。示した先に件のシュレーターがいた。

「モリ、だそうだ」

長い柄の先に尖った石のようなものが取り付けられている。それを片手に握って、シュレーターは海に潜る。毛色が変わりつつあるシュレーターは、成長してからもやはり早く泳げないし、旋回もできない。その代わりに、手に持ったモリで遠くのダゴンやディープワズを突き、捕らえる。見事な狩りだった。

フンボルトは考えを改めた。

「生き残るぞ、あいつは」

それを聞いたアデリーは複雑な表情を見せた。

「それがいいことなのかどうか、俺にはわからん。俺はあの、モリというものが怖くて仕方ないんだ」

「シュレーターが」

またアデリーがやってきた。慌てる友人を落ちつかせ、二羽で巣へ向かう。

浜辺で、シュレーターが何やら作業をしていた。

何か縄のようなものを引っ張っている。ゆっくりと、だが着実に引き寄せられていった縄の先は、大きな大きな網へと続いていた。

浜辺を覆いつくす巨大な網が引き上げられる。群れ全員が満腹になるまで食える量の獲物が、網にはかかっていた。

「こいつはすごい」

フンボルトは素直に賞賛した。だがアデリーは、また渋い顔をしている。

「どうしたんだ。これだけ獲物があれば、誰も飢えなくて済む。素晴らしいことじゃないか。お前の子どもは、救世主だよ」

アデリーが首を振る。

「わかっている。わかっているよそれは。けれども、俺は恐ろしい。恐ろしいんだ。前にあいつが作ったモリも。この網も」

「どうしてだ」

フンボルトが聞くと、アデリーはやおら考え込みはじめた。

「わからない。だが、遠い昔、この先によくないことが起こったような気がする。そんな気がするんだ」

フンボルトには何のことやら、まったくわからなかった。

「シュレーターが」

毛が生え変わり親離れしたはずの子どもの名を叫んで、アデリーがやってきた。

「今度は何だ」

「いいから、来てくれ」

バタバタと走るアデリーのあとを渋々追う。

今やシュレーターは群れの英雄だ。シュレーターが様々なドウグを開発してからというもの、フンボルトたちの群れは誰一人飢えず、誰一人狩りをしなくていい。海へ入るのは身体を湿すときと涼を取りたいときだけ。ダゴンやクトウルフといった大型海獣に襲われることもない。むしろマキアゲモリやファランクスをういて彼らを海域から追放することだって可能だった。

今やペンギンは名実共に世界の王者だった。そして、そんな世界をつくりあげたシュレーターは多くの同胞たちに崇められ、彼らの指導者的存在になりつつある。

岩場を越え、海へ潜って浜へ向かう。

浜辺へあがると、大変なことになっていた。

炎が、高く燃え上がっている。櫓が組まれたその前で、アデリーの末っ子、シュレーターが両手を挙げ、身体を揺らしながら何かを唱えていた。そのうしろには数千羽の信者たちが、同じように身体を揺らしていた。

「あいつは、火を手に入れたんだ」

燃え盛る業火を見上げ、フンボルトは呟いた。赤々と染まる浜辺を、二羽はいつまでも無言で眺めていた。

ペンギンは繁栄を極めた。ついに空を飛ぶ力をも手に入れた。遺された聖域を奪い取り、鰭中に収め、すべてを支配していた。

「ペンギンにあらざば生き物にあらざ」

そう言いはじめたのは一体誰だったろう。

「使者が、こいつを寄越してきたぞ」

アデリーがフンボルトの前に、紙片を放り出した。

今や器用に動くようになった鰭で取り上げ、開く。予想通りの、降伏勧告文だった。

「父親を自らの手にかけたくはない、か。今さら、よくぞ言いおるものよな」

火を囲んで車座に、十二羽の老ペンギンが座っている。それらの顔を、フンボルトは見渡した。

「だが、あやつらの思いどおりにさせていては、我らも先の神々と同じ末路を辿る。わかっていような」

十一の顔が、同時に頷いた。

「では皆のもの、最後の戦と洒落込もうか」

高分子ブレード、パイルバンカー、タングステンドリル。収束レーザー砲、ブラスターカノン、百二十連装マイクロミサイルランチャー。各々得物を担いで、立ち上がる。フンボルトも傍らの長大なスナイパーライフルを肩に担ぎ上げた。

老兵たちが次々と砦を後にする。アデリーとフンボルトだけが残った。

「これで、よかったのか？」

アデリーが肩をごきごき鳴らす。

「いいも悪いもないわい。わしはずっと、あいつが怖かった。だから、止めるに止められなかった。その報いが、これよ」

片方だけになった目を細め、笑う。

「だがな。歴史を繰り返しては、いかん。それだけは、いかん。それではまるで、我々が何も学ばなかったようではないか」

「現状を見る限り、その通りじゃな。我らは阿呆の集まりよ」

「それでも、足掻かねばならん。繰り返さぬためにな」

フンボルトも笑みを浮かべる。空いた方の鰭で、アデリーの背を叩いた。

「行くか」

「おうよ」

出入り口の向こう側から光が漏れている。その光に包まれて。影だけになった二羽のペンギンが少しずつ遠ざかり、消えていった。

(完)

自分の世界が欲しかったので、今年のプレゼントはそれにしてもらおうと思い、せっせと靴下を編んだ。争い事が何もなく、互いが互いを思いやれるのはもちろんのこと。すべての人が私を褒めてくれて、賞賛してくれて、私が右といえば右、左といえば左を向いてくれるような。すべてを私が選択できて、しかも正しい選択肢がいつだって示されているような。そんな世界が欲しかった。

世界一つが丸ごと入る靴下を編むのは大変な作業だ。だが私は来るべき新世界を夢見て、何日も何日も、動かす手を止めずに編みあげ続ける。

そうしてできあがった靴下は、星のすべてを包み込める大きさだ。

それからはっと気がついた。靴下ができたのはいいが、今度はそれを吊るしておけるベッドがない。私は慌てて木材を切り出しはじめる。

そんな私のところへ、ひとりの男性がやってきた。私の行いを見て、かぶりを振っている。

男は懐から金貨を一枚取り出すと、指で撥ねあげた。まずい、と思った時にはもう遅い。

金貨は天に昇り、幾つもの流星となって、世界を覆う私の靴下をずたずたに引き裂きはじめた。

やめてくれ。何でこんなことをするんだ。

私は怒鳴り、取りすがる。だが流れ落ちる星々はその数を増し、留まることを知らない。

私の靴下は燃え落ち、灰になる。

靴下と共に崩れ落ちる私に、男は傍から小さくなった星の欠片を拾い上げ、私に握らせると、溶けるように消え去っていった。

(完)

緑乃帝國

<http://p.booklog.jp/book/82511>

著者：緑乃帝國

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/chabayashi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82511>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82511>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ